謌合

遠鴻亭歌合　仙洞〃〃　康正元年〃〃　七夕歌合

文安三年〃

（朱印）

遠島御歌合

後鳥羽院　嘉禎二年七月

題

野霞　山桜　時鳥　萩露　東屋

時雨　忍恋　久恋　羈旅　山家

作者

左方

女房（後鳥羽院）

前内大臣　家良公

権大納言基家

沙弥道洪　入道三位知家卿

藤原隆祐

右方

従二位家隆

小宰相　家隆女

正三位信成

如願法師

下野

久曽神藏書

廿番 安長卿作女　　安倍長総
安倍親成 修理亮　　安倍泰清 泰長卿息
藤原安茂 入道左馬府生茂子　　善法師 入道信生
判　女房
一番 御製
左 持　　女房
塩竈の浦の干かたのあけほのに霞にのこる秋の夜の月
右　従二位家隆
春の夜のおほろ月夜の名残やはあかす月にも
見る山判は事たえぬ後て事かたち後を
摂政難波のよしあしわかる人ぞの浦々波を定

まもなる代範の殊に有事に宇一字
の詞をはなれぬよしは柴の月みて三幾左の
はとぬ深く名れも最の深川の風をくし事なく
和歌浦をすて備て十年あまりに年の春山
をくれと更に此命をまてあまたあまた稀れ
も従二位家隆は和歌の道の二代新古今
の撰者也八十あまりもの命は露のあとあるし
猶て風に消えて猶まかさ花やしてと家
興の詞をあとらしさてくみ増さそらんと思ふ
なれよりて秘の出事の僧に付てうちか
ぬ出すもの方に花あつめて書けえらん

人の数にもつきぬ及ばれは時なると自如て古
哥の道を学ひ、世にもてはやさるゝ人の枝のよ
のくに風よまむ事、昔偏ぬられとも是を
瞻心の清きのそ如く、人の此ゆみを酌み
とは言ふ事を見て、末流あつる事かくはしなれ
是能つきみもあく終にも披の上ゆかりし事ぞ
侍て、また女子に是ぞ伝へける、八代集の哥よ昔
はしめ、待るに両親もなく哥もかけすは安からぬを
らすいさんや、ま世の道、万葉時代も十余
の君の一首もいまた及ばれけるを、いひ聞えし
よめんなるも人とゝめ並べたる物もふかきを哥らん

年のよそひも花にこそ色よる年もなかれし
見えらくみゆく姿計をもつらく侍りし一番
乃きたるなる勝事にて持速れとも是は右
同おもしろく、よみものもあしく、右哥おほけなく月見え
清ね激は歌義は没ありて詞けしきすかた
様をかしく侍るを通れとも一首の品は事よし
よみて、其更勝哥とはせらるなり

二番

きぬ　蒂内大臣

大空やかすみの里にかゝる夜の行末かけて見すなれ

右　一

小宰相

海人乃塩やく里のけふりはきえぬものとやかくてみえける

左小塩の里れ歌は春のけしきあらはれ
かすみあまてみゆるく見所なく見ゆる
つ右は春乃うれしさやかなる心も
思ひやられて見まされ侍る方よろし
かくて持とすへし

三番

左勝　権大納言基家

春の夜のかすみの龍思ひ出やはや神世の花ならん

右　正三位信成

かすみをはれてみえにし

さく花にかゝる雲のさかりに左勝

の衣ぬきかへてや侍らん

四番

左勝　藤原道経

明ぬるか霞の衣ぬきかへて花の春の世の花の袖

右　如願法師

あまの戸の明ゆく空の花の色を春の桜や守るらん
さの句は見所ありける黄なる色
あまり心も言ひまされ侍るをもつて
とりなしてかく左の勝

五番

左勝　　　　　　　　　　　　　　伊経朝臣

朝日かけまつさしのほるあし引の山のかすみのおくそ見えける

右　　　　　　　　　下野

山姫のかすみの衣神もきて春たちくらし朝日かけさす

左右古の霞の袖もあれとあしたの朝日影あまねくてらす心やまさり侍らん

勝と申へし

六番

左持　　　　　　　　　　藤原

山の端にかすみてのこる月影にさえし春の霞たつらし

右　　　　　　　　藤原長経

朝日さすあさまのたけの霞にもけふそ春くる山のはの

たなひく霞の中に朝日のかけもさえかへる遠山の

雪ははる／＼と見ゆ　古今の体にや侍らん

ことなる事なくて同し程にて為持

七番

左持　　　　　　　藤原親成

いつしかとたちそめし霞かすみそめて春の風吹

右　　　　　　　藤原家清

春霞たなひく朝のけしきにもうちなひく風やさそふらん

左ことにかなんめり

八番

左勝　藤原友茂

ねまちしつゝやかすみのうらなみにあはれはれぬるはつせの山

右　善恵法師

ゆくしるしの雲けにけり花ぬるくれかゝしむものゝやうきを

左のうたいかゝはつせ山よみあはせてえんなるにや
まかゝしむものゝやうさまにひなとはこえ侍れとも
まさりまさるにや左の勝はべるへし

九番　山桜

左持　女房

人のよはみてこそしれの山の春の雲あけのさくら

右　家隆

おもひやるこのもかのも桜花山とうへこそ成にけれ

詞をうしなひたるかたもなし人のこゝろ
ともしらぬかさらにいかにも申つかぬ
よき世のうへにてもかくて
よき持とや

十番

左勝

あまのかは

数ならぬ深山かくれの遅桜そらのまた花まつらく

左　　　　　　小宰相

右はしかすかにいひなして花の深さこそ
左にまさりてはおほえはへれとも右のまさる
ことの深く見ゆれは左の勝

十一番

左　　　　　権大納言

白雲か野にも山にもかゝりけり桜にかほる風そ吹

右　　　　　信成

葛城や花の桜のさかりかも雲のをちかたになかめやる

左右野山のかゝれる桜に一村にて

いつれも花と雲のまかひあまたよみ侍れとも
右乃雨雲ことに野山の雲にまかふ花
ともになくてともに花にも見えまさり難と
もなし深く右はあるへくもなきにて侍ま
くさ侍るに雑なるにや右まさりて勝とすへし

十二番

左　　　　　道経

梅かえし花の下みちたとれともあやなくもにほふ花の香

右　　　　　侍従

見よみつゝおもひしかなう桜花世ゝ数深山の風とまされてん

左右歌ともにいひすくれたるともまたなしとすへし

此立る前後未入道判にはなをよし
抄の判によみ侍るよしをかへしと
申侍りしに右方をも宜しと為体被出

十三番

左勝　隆祐

桜花つらふあまり白雲にかゝる峰のかすみの山

右　下野

桜さくみ山の花の白雲もむかしに立そふ花の霞

左方させる難なし右歌是をも見るに似たり
み山懐旧の心あしくはまさりても侍れ
左猶勝侍るべしや

十四番

左勝　少将

霞たつ色もかはらぬ也そらにかすみつる山の嵐

右　長綱

葛城や高間の山のはる遠て見ゆるあれは花の色

左宜しく右も右方たかまの山をなかめ侍れ
事なくをかしく右もまさる事なし山花

右勝

十五番

左勝　歌成

山かつの見るらくはなくもかくれ花桜人のはしとあやなくもあまたならん

右、　　　家清

しま乃山のひかりはけふこそはるかなる桜咲れは
右方山乃かひかりみゆるは雪とも云歟
為之事に宜くこそ也嶺の方よりさ
しろくみゆるやましるしなりけれ左
の方山のかたもすそなる桜花之歟
右方のふもとつむ勝と定

十六番

左　　　友茂

桜さく吉野の山の山風にかけりもみえて花ちらし

右勝　　　善信法師

花のちるはあまつ空かくれ雲とみゆ
さし寄も色なき雪もなく又あかなからす路
こそ桜よりもと右方まくら路にやそれ山よ
おりひかうらみにも明かなら山よりと
かれもとそく木のはしる木よりやらあれ
し吹嵐もきくやちるとも山の方よりも云
あまたぬれく方かくしるまきは右勝

十七番　時鳥

左　　　女房

さ月やまつ時まししかるへき時鳥の声よ一声

右、　　　為隆

遠山の里のはつしくれ見えしそのひかけにいてし山こしに

左時雨の色もよしあしを見えかたきにや侍らん是を左かつへしや右方も

しつくしとくましく袖のそてあらしも持とし

十八番

左持　前内大臣

神よふるあきは紅葉の杜の新玉のあかしもやらぬ

右　小宰相

里わかぬ時雨や五月雨時雨あらぬ色も

さらにかゝるさへあはれなり杜も

まつは時雨の杜とあるゝもとにすみける

あらしせこさらもなかちのひしくしつくる

又やもしれぬ宿やさらし見捨る侍宜しく持

十九番

左持　権大納言

草枯の風をあらしにたちまさる時雨ゆくなり

右　信成

まちかてたのむ人の時雨もくれゆくに

さなえよりおくれて見えし文持とし

廿番

左勝　通光

ぬれしのそなたにやまからの時雨にたつ

右　　如願法師

隔てぬるやまの梯の絶えだえに雲に迷へる郭公
左右ともに郭公のさまなれど右の歌は末の
句いますこしやさしくや聞えはべる

廿一番

左勝　　隆祐

ありあけの山の末の郭公なかなか雲らぬ初音なる覧

右　　下野

橘のかをりを雲にうつしてや山郭公なきわたるらん

左初音めづらしく聞え侍れば左

勝とす

廿二番

左勝　　少輔

五月雨に晴れまもなく郭公雲井の外にこゑきこゆなる

右　　是経

かきくらしをりはへなけるほとゝぎすなにかはゆめのまどろむもなし

右の歌はなほ心きゝえがたし左は何事

も難なくこそ侍れど右のうた今一

際聞えざれば左のかつべきにや

左はいさゝか勝つべきにや

廿三番

左 持　　親成

都出てわれのみ里人となりてや雲井の月を恋しかるらん

右　　家清

折しあれ月もろともに秋も五月雨に時わかぬ雲井の都は外

今宵時わかぬ雲井の時鳥鳴なるさへ遠

恨ても秋光来なき秋の左右足引の山のあなた

さま住人もまちてや秋の月見るらんと

ともに同しこゝろなれはもろともに持とも申

持とし

廿四番

左 持　　友茂

若葉れ竹まて付て時鳥も秋深くるまて鳴らん

右　　善光法師

移り行秋てもうつるなる秋と今年も待へし山郷に

左右持よ

廿五番　萩露

左　　女房

東かよふ夢のやとりに暮ぬるも秋風の吹く萩の上の露

右 勝　　家清

あやなくもやみにみえぬる萩のむらおきて秋萩の露

左右[illegible]もみえすよしもみえ[illegible]

ゆふ露のところすまさらくあはれし
まも侍らむ勝とよろし

廿六番

左

秋萩の露にみすれはゆふかけの風にしらぬ色そ見えけむ　前内大臣

右勝　小宰相

定なき風に任するもしほ草あはれ萩はもとの色にそ

左歌の露のよすかにさそふ風吹にたえんゆへこそ侍れ

左の歌あさくもきこえ侍る葉末の秋はもとの色に

にしも心えかたき文の上に古き歌の詞をもとめ

かしこくこそ侍りて勝とよろし

廿七番

左持　権大納言

秋風のたちぬる萩の露深み花の枝にもしつくあるらん

右　信成

久かたの光をそふる露の上にさして秋の萩の上風

さやかなる月に萩の花に露のしつく見ゆるかな

廿八番

左　道我

白妙の萩の下葉も色付て思ふ露の涙さへ秋の夕くれに

右勝　少将律師

白露の玉はさえたる萩か枝に波数そふ秋の夕暮

さなれはやさしき秘かまでとも右をとこと
うしぬけともあつまく艶にもさらやの勝とし

十九番

左勝　隆祐

文殿の末葉に風やこえぬらん露におしふす秋萩の花

右　下野

地におりし庭はいかにしのはしもとくまでしまて露におもはしかな庭の萩原

左歌露におもはし秋萩の歌よろしくみえ侍

右も難なくみえ侍らねは左猶勝と申へし

廿番

左持　少輔

むらさきに萩かわけまとのまてみえけれは秋の夕暮

右　光経

絹さえぬ雨や秋のあさしの露なれもしく庭の萩原の花

さらにわかれ萩とも深く聞ゆへし

廿一番

左　親成

露しけき庭の萩原ふく風にいかなる人のかりもせん

右勝　家清

ちくさなる枝のおもくも萩かはらにまよふやましかのなくらん

左歌萩の人のかりひと源氏の事ありかたく侍へし

わらもとを右歌よろしくみゆるに右勝と申へし

卅二番

左勝　友成

とふくあらしの空の秋風にそよとこたふる荻のはずゑ

右　喜撰法師

今はわが忍ぬ世とならぬ人ぞ来ぬ村松山の

さそはれて見ぬ世の物かたりにそふる波と

かぬ身をしのべとこふる人の波の音にも露と消く

左右ともに露と今の波まで見えしかすくなき

来るけれどもあはぬ雑まゐてなほあるべし

持とした

卅三番

左　女房

名の里ゐる乃鹿にぞ二度たえてけくしなほそへにし事

右勝　安隆

門杖乃あの里をうち行ぬる康の声にやなうて

左の秋の一声乃露をうかべて行ぬるにも康

のよはなる夕やさしく声にも勝る所にて

行ぬる持にてされたる心ぬる宿りの里なる

までそれらしくとりしく行かれたるにそ

てそらくあしくも目をもうつくしくあく心を

りにまよひけるとぞ云ふ雑や結らんしとて侍れ

おなじ古今は歌迄にぞるよみ出まして高常にぞ

秋なくへつまよふへしき侍と申べし

廿四番

左　前中納言

まれにしあとたえぬ人もまちかねて秋の夜すがら

右勝　小宰相

流れゆくほどもなみだのしぐれにて秋の山の秋風のこゑに鹿

右歌はさもあはれに聞え侍り。左も心の外の言葉の庭にや

かくよろしきによりて右の勝とすべし

廿五番

左持　清之助

さをしかの萩の下葉もしらぬまの紅葉のむさしの

右　信誠

しかの声の月にはかなき道のまに鹿やなくらん

右歌も鹿も紅葉のむさしのにあはれて立ちかへりぬ

未だ心もとなき許の鹿や待たるる

ふかくしてよきことのはありてよくみるべし

廿六番

左　道永

雁が音の渡るや雲のあなたより月の雲の立ちにける鹿そなく

右勝　法師

小山田の風のふくままにたよりのる鹿の声の哀れの秋

左哥指したる難なきにや　右哥の詞心うるはしく勝とすへし

廿七番

左持　　　　　　　　　　　　隆祐

鳥羽山の雲やふかくもたえぬらん月すむ秋の山の端

右　　　　　　　　　　　　　下野

秋の夜はさらでも床の浦山おろしさむく寝覚かちなる

左右ともに心ふかく聞ゆ　勝負なく持とすへし

廿八番

左　　　　　　　　　　　　　家隆

今更に月も宿らぬ床の上に木の葉の時雨ふりまさるらん

右勝　　　　　　　　　　　　長綱

木の葉ちる嵐にまさる有明の月を見る人やなくらん

左哥末の詞つゝきよろしからす　右哥は心ありて聞ゆ　右勝とすへし

廿九番

左持　　　　　　　　　　　　親成

さえわたる夜半の霜夜の風さむみあまの川原の浪そ氷れる

右　　　　　　　　　　　　　家長

何となく秋風ふくも涙にてあはれをそふる庭の浅茅生

左右の歌ともに心ありて聞ゆ　右は詞よろしく左もなすらへて持とすへし

乃ゆらんして清くさやけき秋の月かな
康ち秋よぬめきたるゝさしゝ鳴さすかり鳴秋の
荻原ならて萩の古今にもあはれさき
おもしろく勝るなくみえ持とまうし

四十番

左 勝　家隆

山さとの秋風さむくなりゆけは長き秋の夜のねさめかなしも

右　寂蓮法師

なよ竹の末ふく風は秋の山は常よりも庫の箱さしけん
右も山おくの庭のこゝろすくなき秋をとこそ
立ちこゆる声あきすき秋の山風のさひしけ

四十一番 時雨

左 持　女房

抽おもふくさきにぬる夜はに降るしくれもかへりみぬ時雨哉

右　家隆

なくさめもたれかとはましうき世にも音にやしくれの袖のすかたや

承久の世に年寄て時雨の神無月かな
右ちかころこそはやりぬ時雨に此かたなく時雨の
おなしほとこそいはるへき世にはこえあまり侍るみて
侍れとも心あらぬかほにまさる持にて侍るよし

四十二番

左　前内大臣

色にみよ昔の人の袖かへて時雨ふりゆく秋のたもとを

右　小宰相

神無月末の宮時雨のふるさとに袖ぬれて数にはならし
ならてえそ上にかへつ袖は人のなき昔の人のかす
袖そよく紅はきのやどのかみの数につゝも
うれし後のならまく思ふもあさましく

第十三番

左勝　隆信朝臣

風の音も秋ぬる紅葉の時雨にしもあらぬ音ける山の村雲

右　行家

秋ふかく雲まよひてしをしくれて時雨もいとゝふかき夜の月

去方時雨といくよみふるやもつさに
あまの原寺あさの嶺にかゝる村雲の
右あまたくみやまさりて勝とすへし

第十四番

左　道助

秋のいろは時雨のまゝに深山路の若葉の緑色あさくなる

右　如願法師

さびしさの山の紅葉をそめし秋ならの時雨
さこそあはれなれ時雨も色にふかくなる
ゆくへもさそあらしくれゆく山の端の空
ひとりあまりにまちかぬるとこそけふ

やん[illegible]古今風としてはいかて古今にもまし
あはれすさのりうつさ新古今集に[illegible]
まはあまり[illegible]も右の勝

十五番

左　　　隆祐

神無月くもりもみえぬ空までも風に乱るゝ村雨の[illegible]

右勝　　　下野

つれなくも猶菊を霜に[illegible]見る村雨[illegible]
[illegible]ものゝ風情も風にまかせて[illegible]
よめる[illegible]見えむを古今と[illegible]見
由来よ[illegible]ともとしく勝侍

ゑ似て候ゆへに[illegible]負て侍ことをもと
いはゞ心あるも猶よりは[illegible]勝とや

十六番

左　　　家長

時雨の[illegible]数しらせは[illegible]庭よそに[illegible]猶と

右勝　　　長綱

高砂の尾上の松に[illegible]村雨[illegible]
さ[illegible]の[illegible]よ[illegible]見て[illegible]
[illegible]とも右の[illegible]の[illegible]村雨[illegible]
[illegible]とよ[illegible]とかく[illegible]
[illegible]よ[illegible]宜[illegible]勝とし[illegible]

四十七番

左勝　　親成

神無月時雨ふるなる松の尾にしくれぬ紅葉もかはらぬ

右　　家隆

錦の色もしらやは神無月いまは松に時雨降らで

さびしさまさる事もありとしらるめり

左時雨の色は紅葉にしめされてなをそ松にかはりあり

右松のかはらぬ色そ所かへつさまもあり

左は錦にての勝

四十八番

左持　　友家

神無月深山もしくれ時雨の色は松による人そ見え

右　　善基けり

時雨ゆく風さへ宿の木葉にも村雨の色に染まる山

さそふ松にゐるほとのこゝろあらはれ

左はおもしろく右村雨まさるとは言をまれ山又宜き

松有る秋その色かはりくる風にてもさとも寒く

事常にそこそすむとも言かすある

くもりて程のあれは

四十九番

左持　　女房

よその中にかきほの袖もこゝに生ひ侍りて夢をみる

右　　　　　　　家隆

しのゝめもあへぬ枕よりぬれてしのせなくて今はた
さ様に申すへくみえ侍り右歌はひとつも心の中ま
侍ぬれはしかも其のせなくてはと見えさせ給はし
左の人の歌も見まほしく侍れとも歌よみあかしは
せし

第十番

左　　　　　　　左中弁

はれぬ間も心のうちはものしたふ涙のかはもと今宵

右　勝　　　　　小宰相

思ひわひさてもいきける玉の緒のたえぬは暮の秋の夕暮の夜は

左歌下句清ぬ物からよろしく聞え侍るを
右歌もよろしく侍り七文字をとゝのふる事は
定まりたる事なれは文の七文字の内に文字
をとゝのへ侍る文字も同し故に右勝にて
こそあるへき右の歌にしもあらねとも聞えて
よろしやさしくこそ右勝とすへし

第十一番

左　勝　　　　　権大納言

渡川神の玉藻かりしきやすらひて人をまつ夜の

右　　　　　　　信成

さらぬたに秋の夕風吹きしほる山の木の葉の散る涙かな

とふ月日あさくかよひし袖の玉藻
の下乱れやさしく侍ていかにも勝

十二番

左　道経

雉鳴や入江のあしのよとむ水おけは浪にさわくやまた

右　勝　如願法師

薦の底まて見えし池のふちなかに桜ちるなり
さらしくかへりてさえ有けれはうちよりの思ひ
やはりかはまさるなくよく勝と

十三番

左　隆祐

且は東に杉乃苔生にけるかゝる度にあさよめて袖に

右　下野

いつまてもさいらうへ池ならは波を後にみつる小松
方遠き常にもし風情有まさる
人も池なりとよみなして優にて
おもひなすにて後に見る勝めきて
秋田乃苗のみなすれともおもふ寄辺
わするゝや面影そ杉のうへさ姿まもあ
をみもいく関るとゝめかれはおほしくし

十四番

右　勝

中将

なほかへしさへこそ返し侍らめ神かへしに猶勝るへし

左　　光経

いにしへの下行水の今もなほ道あるみよのなかれなりけり

あかすのみ見るにかへりみて心ありと見えて左の下行水と

いふ事もなくもありと左勝侍へし

第五番

左勝　　親成

下野のこしまの海やかすみつゝあけゆく末の春の夜

右　　家隆

数ならぬ人やとかめむすてはてぬ神の海と

さらに侍らぬ事なくこそ見えて侍れ左は

のこれる海やかすみてとあり手懐にもすこし侍れ

第五のうたにあはれの事に侍らす又よろしく

みえてもことなる心のうちもなく数ならぬ

人やとかめむも右は心もしらぬ事に侍れ

されはいかにも勝侍へし

第六番

左持　　友茂

秋の夜の長き夜すからてらしあかし神の月影

右　　善恵法師

逢坂の山の端いつるあかつきの月の影さへ[illegible]

右歌いとめつらしくそあるをしもさこそ難ありても
吉野山の月あかしとのみに水ありと振舞へる様
なりけれと猶て月よりまさりて持とせむ

十七番 久恋

左 女房

来ぬ人のみ頼みてそ幾年山高み松の人の音もなきつゝ

右 家隆

こひをのみ心にかけて年ふれは世のまゝなる我身かは
おなし年をかさねて恋わたる思ひの数は宜
かへるかたなくいつはりのまつ身には
やのかよひこしに持とすへし

十八番

左 持 為家

いつまてもいのちもしらぬ松山の心にはかよくらぬなきを

右 小宰相

年ふれは頼みしことの心のほかにまたもうきにしほれて
たえまにしのひてこそすくなくとも
こゝろにかなふ人もなくよしなきものはなき
もえてもみゆる宜為持

十九番

左 勝 権大納言

山桜の花にて雲とも霞とも見えわたる海の

右　　　　　　　　信成

浪間とは成ても年をへぬるかな袖のみなとに逢人

左哥くまもなきこゝろはまかるゝとも哀なるを
みなれてよき人侍らん右哥浪間とありて年ふる
と読る人心もたくひなからん哀なるに侍らは
て袖のみなとのかくれなき事にや
あるらんやはらかなる左の勝

十番

左　　　　　　　　道助

いつも見ぬうき年のひとよはかはらぬ心もなし

右勝　　　　　　　如願法師

知らぬ身をうきよのならひとて人をも恋ぬ物かはと
右哥波の名ある心をとて侍る也いとゝ哀なる
覚え侍らす哥はかりにや侍らん左事はしる
つれなき心を思ひしりてとは侍る事なる右
哥持て難なく侍らん勝とし申へし

十一番

左勝　　　　　　　隆祐

なにはめの袖の浦波かはらぬ心もなし

右　　　　　　　　下野

色紙にてのこしとゝめぬ杉むらやかのみの
友なきあるかなしみのこよなき事へし

霞みてや嶺たかみえ見えてはるかに上るにも棒ち
とさてあるに趣ある事とよめるは若何事にや
然左九頗勝にや侍へし

六十二番　左　　少将

聖もと雨新まつ尾路をわけ見えぬ跡人のまつらん

右　　長経

おとはしみ山の里の松の流れにし年もおなし杖の末にし
たなこ年とまちし人のなやましき雨や古寺
心とも知らぬ杖の末枯も長しかなしれ
述ても右を為勝と出し

六十三番　左

右

六十四番　左　持　　友茂

我雨よふる木の許にさきあらしの吹けは神楽清ら人
右　　善信法師

玉ふのこあさ波風に嶽をえ見ほよ新しき人年は絶す
あり

さ左右ともに難なくみえ侍れは持とすへし

六十五番　羇旅

左　　　　女房

数ならぬゆくへも年経て塩なれまさるわか袖に波そえしよ

右勝　　　家隆

旅人待つほとはけし岸根に寄る浪のかへしに濱荻

左の哥すゑまてめく様に侍れともさらに難な

なすらひやとみゆるを右哥物よくきこゆる

きし岸根はわれにくゝ浪のあらき濱

荻と侍るもあまりよくきこへしをとりて

猶右勝とす

六十六番

左勝　　　内大臣

日数さへこのくれわかれゆくをあすか河とほき浅瀬の色

右　　　　小宰相

旅ぬゆくも立ちぬるあさ風の浪くかりて袖よりけふら

左哥このことわりつききこえとえらく心わたるを

かつゆへ心つきなくやさしく侍るを右哥も宜しくみえ侍れ

とも猶左勝とすへし

六十七番

左持　　　權大納言

吹よしく奥の塩干の中湊によするかたの松の浪

左　　　　　　　　　　行成

ゆふされぬ山路の露にやとかりて月もかたふくあかつきのかねしき

右方ハ、此歌山ちをかけるうたにや、猿聞の歌にてあきらかなる

歌をおもはく霧猿もなしとはよみ人あまりおほく侍り

流石に有明の猿はかくれなき歌の時分にや見え候

勝負かたきてくとも侍れは霧猿と猿とは何を

とりて月のよはにさらにちかく山とよむなるらん

みるもしるくつきぬやうなる歌侍るにや

左方霧猿の心を思ふにも左勝にも侍るは

またあるへきにや

十八番

左勝　　　　　　　　　通光

まつ人をまよはす夜の夢覚やかゝる山はまの猿月影

右　　　　　　　　　　寂蓮法師

まつの風八十路はけて君まつかゆるしなき思ひの年

あまりにまつ人のあはれを猿しくてみゆれ

いふらきよそのよそ月影とは右の中にはけて

まつ人をよせてまつも猿猿ときまれとは

十九番

左持　　　　　　　　　隆信

ひとりまちまつまはなみとなりし露にくれた月影

右　　　　　　　　　　下野

足引の山のはしのにこそあれ神まつるきねのかけより
左もあはれなるを見てなほ見えあはれなる様によそへ
こえたるをとりてやさしき様にかなひ侍れと
も勝まさり侍るへし

七十番
左勝　小侍従
ゆふくれはおとにやきけと思ふらむまちわひてなく秋の声
右　長保
ゆふかみ秋をたにかはとあてなるやとさらにかすまし浦
左の歌はことにまかして中々宜しとみえ侍る
判ことはすへて左勝

七十一番
左　観成
猿の声もかなしく山路にきこえて更にもあらはす吾身ふかき
右勝　安法
秋の山猿の声まさり松かせのかよふ秋の野辺の秋風
左の歌もさまたけあるに右をとりて右勝

七十二番
左　友蓮
ゆかしさの山ちとゆかれねるをあけの峯の白雪
右勝　善法師
ゆかしさを作りしふかき花あはれ秋なりや神そ見まほしき

左哥の猿のなきこゑは谷あらしにまかる文字の心は
やらんよくハおほえてもみへさうらふ右哥にかなひた
るもありて空みゆるは猿のなけやたちたるきこえ侍
思ひやられ侍のり草の中の花には猿声すまれ侍る
牀の里まて丹猿なすまれおりひましくへし
殊る哥の姿やさしくみやまのは谷の勝

七十三番
左 勝　　女房
初そあさまて千里を見へんてふ花の月こそふかれぬ袖さ
右　　家隆
さみしさハまくらに見ゆる鴫の山里風思ふにかゝしてらして

さてこれと思ふらむ山の家より待ちをまさ
ときなとともやらんとは年へて見えて思ひ出もて
こうのうしと深くうる人々かれは松操一番そ花の
勝にてよしへし

七十四番
左 勝　　前内大臣
今日みれは春を山腰より夏もなくなれるをくれて其先の家の松風
右　　小宰相
住よしの深山の奥よ志てまたまつ秋をとふぬ海
左哥まつこしの萬ちも山かれてみなれ左哥の姿
丹待る古哥秋みをとふへき無意ゐ人中まてと

と和歌をまちて勝と申へし

七十五番

左持　　　権大納言

世のうきにかへてみかしかれのしるしをもえむこそすれ

右　　　信成

住人もくるしきを知らぬ心ややあかしもとの奥の山風

さえわたる月の影まてかけつゝも清き宿かな

持とまうすへし

七十六番

左　　　通光

冬の夜の霜の更くる枕にて月をも見るも松風の下露

右勝　　　女新清法師

山の奥は深き山とも思はれぬ心の月のあらはれし宿

右歌のあはれにまさりて深くみやまの錦ほまさり

右為勝

七十七番

左持　　　隆祐

秋の夜の月も三よりの程そなく見て山の奥の

右　　　下野

世の中のうきはてもなき心にて見しは月の影

ありし月よりもなほ見る

七十八番

左持　　小侍従

いつまでもみちは秋の里なれは山のけふもみちぬる嵯峨の萬里

右　　長経

七夕の世のこは時雨てさらにまたなにかは山の奥の

左右共に雑可なり

七十九番

左持　　観成

山里は庭の紅葉を橋わたりて嵐を寒く身にはかへれる

右　　参俊

河も時雨ける庭の落葉にいふ嵐のおとよそに何もかはこえて

左は始事ありて庭の落葉と云ふ詞ならて
そいうすく山里のもやうに壁の秋すきのみて
もとまことれよ木の葉てぬらしよあくれ侍る秀歌
ゆゑに侍めりてありしてまうみちよりなるか
さまてあけたまてよろしきとこえし

八十番

左　　安成

足引の山の庵にすむ人もとふ人もなき世をやはてなん

右勝　　善住法師

雲かかる荒れの松の木の間よりも世をのかれても住みぬへき

左右共にさかふ難しなけれと右は勝やさし

左ハ猶宜しくて為勝

仙洞歌合　寶徳二年十一月

題　河落葉　暁千鳥　遠嶺雪
　　忍逢恋　松歴年

作者

宰相典侍　禁裏　　二條　仙洞
式部卿親王　　按察使公保
右近大将實量　　權大納言宗継
大宰權帥實雅　　沙弥祐雅
沙弥浄空　　左衛門督持季

權中納言資任　　權中納言教季
權中納言公綱　　侍従持為
右衛門督雅親　　参議政賢
前甲斐守明茂朝臣　　左兵衛督有俊朝臣
散位伊忠朝臣　　權右中辨親長朝臣
左近中将為富朝臣　　左兵衛佐永親朝臣
右近中将經秀朝臣　　右近中将房卿朝臣
左近中将孝春朝臣　　右近中将實右朝臣
右近少将公澄朝臣　　法印尭孝
民部權大輔行秀　　蔵人式部丞源政仲

判者
関白
飛鳥井中納言入道

一番　河落葉

左　勝（勝）　宰相典侍

うきは河浪にまかせてもみぢ葉やなかれてたえし泊の山川

右　沙弥祐雅

浪の音にしらるゝつれなき紅葉せく瀬の川の木枯の色

（関白）左右共に首尾くるしからす侍れは思ひ及ひかたく右の上下の句の心の字あまりしも、ことなる所も侍らぬにや、

歌からはこれはまさりて侍るにこそあらめとて人の申しかは左のうたもよしとて侍しを、たゝしやうれしくて聞えしとこそ侍れ

左勝とや申侍るへからん

（飛鳥井中納言入道）左歌うつくしく見ゆるにくらふれは、右の歌の紅葉ちりしきたる心あしからす侍るにや、右勝てと相計て首尾おなしほとなり右負

あらし吹とやはの滝の音はけふはさそひくる一やはるらん
むかへたる勝

二番

左　持

もみち葉のちるをまもる大井川わたらは錦中や絶なん

二條　按察使公保

右

これは本の大内の山川のいろ紅葉の名は名のみそうりゆく

開白
左は川のおもかけやしけるをひとへにうつる河の

かくらはしきおもかけのみやこの大井川よりもちらく

みるしはえ君の人をもとをえさせすもりした

今年すさやとこれをしくおもしろれと本の

きえてはまた風の水の色をうつるをほしやさそう

たしかにその名はよろしくきこえ侍れとまたしく

おもはるるやうに侍らん

元亨升中納言ニ入ル
左はうれのかはらこそおもひつゝとあらく大井川

くらすいうにはやさしかんと侍りて見所ありく

きこえ侍る左の本のきこえていそまの水の色

うつくしくよろしく侍れとまさりてこそみゆ

三番

左

式部卿親王

秋の色は霜と露とを山ひめの染るもみちや木の葉なるらん

右　勝

大納言実量

山風の木の葉ちらせとうつろひをさそふ川瀬に紅葉の色なれ

開白
左は外題の霜と露とを染めはさすかしとはいふことを

おりひたゝ伊勢のせきはまてなとす跡はいせにと
いふへきにあらすともいは三代集にもいせにといへる
たいしかるのみなともあしはなはやよひの衣に
あまりてきこえはへりしこゆるきの名ある姿
戒善寺中納言入道
たりきこえはへれは大まさりはへるへし
この五首よろしくはへるを歯と申すへきあれ
はさるへくこそきこゆなるやうはへり右山風の
吹のせさりてこそ此ほしこゆるきの名なとと
いふまてにはかはしまさるともいふへきにや

四番

左 勝 持
権大納言家経

吹風も山のはしくみてけり紅葉はよるも大井川の水

右
太宰権帥實雅

大井川浪にはけしく紅葉はの流るゝ嵐の山めくりして

開白
左の歌よるといふかくなくとも尾上とよめるとありなむ
にもよくさむと優にはへるや右は事も殊に見えはへ
らぬをこそ下あしきの山あらしやめてのよそれは
戒善寺中納言入道
へらんにも左勝と侍るへし
左のりうたにも大井川右のはけしきにくく
とは目くれまいるなるを申すへし
あはれとやきこえはへらん

五番

左 持
沙弥浄空

山さとのいつよりもしる紅葉やゝにやゝかなるけのさかりかな

右勝　左衛門督持季

打はらふ松の嵐のまにまにそ雲のいくへか出る山川

（閑白）
しら　たえあけの風の吹とほらんと思ふかせはまうく

いつくしくきこえ侍れと順徳院の御製に

これ心の見ゆる様しやうに定て侍しも萬葉集を

よりや入侍たひつゝるへしとや右方の申ところの

入ぬ新のまと思ふ侍て優に侍れとも〳〵いくらは

のぬりしものは此はまちなれとつゝまくをし

きるとやうの由にはせあくていつかはことをは

（左方中納言入道）
ゆふやうに侍るにや

きこえの色とあけのうらはまう入まかる

こしの地にけ侍るよし左右つらしき事にも

侍しもを勝へきにや

六番

左持勝　　権中納言資任

此はら山のふもとや大井川井せきのかけはゆきのやまかせ

右　　権中納言教季

山風やきのふはとなる千鳥河川つかりとも花とりもの花

（閑白）
右方申やまかはのゝ此の花も人のみけるは

けふやといつはちりはえて〳〵ことかなを

侍らしといつひやものゝ侍し制になつらしを

よしあつやましきて侍とたひやそしらんに

（左方中納言入道）
くつきて侍り猶きこえや侍るん

きハりありやしかれあさくのつかまうかとそ見え

大山のせみこゑうつりて見えけぬかきらめつゝりきあさかほ
をとおもへる其心ことなりとみえて言料おさなきにや

七番

左　持　　　権中納言公経

せりかはの入かはしものおもかけ川やまきのはしもむすふしらなみ

右　　　　　侍従雅為

あきかせにあふ衛士のかゞり火せはきとて昔にかへる芹川のなみ

判詞（開白）左歌山海と秋の山といふよりてはなかくもいひつゝ
いつきよそなるとはなれとみつゝいさゝかのそれ
ゆかしく同しくはきこゆるとさはおもひきのと
ゆゝしきの字あるといまさかなきを絵よゆかしや
かならずむつかしく侍るとはいひかへかぬへしれ

かゝらんやうに同しきのことはなきなれたかにと
きこゆるといひさくらのかけしはゆかしくる衛二
首の御未聞ゆかりおなしく侍るめ
右やもさかりにあるを衛とゆるを昔にかへる（注：五代十四世御製に入道）
むかなかいまたゝ侍るとやいひさきや

八番

左　勝　　　左馬権頭雅親

大井川みなそこにうし新してみ流るゝせゝはかりなる

右　　　　　参議経資

冬の河ほりし紅葉の錦のいろまて山風ぞ吹

判詞（開白）右歌かはらしとさしてこそ枯木の錦と賞
せられゆるくもみちもつるゝ哉てゆるくへさきてあるれ

ぬるゝいまこゝろあてにしくやきこしめし左たるの
方の判詞二の句さへてやしなれともこゝろ渡る證様にや
定家卿中納言入道
右のうた判はさしてせんにうかゝはかりの文見え所
ありてきこし侍るを右の文猶わたらせてあられぬを
侍らはいつまてすてらるへき心なるをとはかりしらると
いひて侍るに二句の詞きえてあられぬといふこゝろすへ
おもくぬてあるへきに落葉とある見えて勝まさ
るよはなしいとかくあはれに侍りなくてはやさしく
しまはしさしるあるはいつさそ左勝へきにや

九番

左

萩甲斐守明武朝臣

山川や浪にかけてよするあきのもみぢは冬そはかなきらむ

右 勝

左兵衛督有俊朝臣

見る人の袖ぞ山風吹くはいつも川のをちこちの名のみなりてあらむ
関白
左の歌金葉にとりて吹くは浪にうつりしより
そのあたりそ入れさせて侍りし見るをやはらかに
右はみちのく名をもたかせむしかあるにあるらむや
宗尹卿中納言入道
右勝
右つよくてあるは川とはなるをおりむしてか左は
そのよるところへはくしく侍りてされけり
かしこるあはれのとひをあくきこしぬさと万
葉の詞に侍れと猶夕よるらてといふつきぬ
後唐まで侍れと右の勝へきにや

十番

左 持 勝　　数 従伊忠朝臣

あつさあつしのまゝ山河よさゝらへけりとせむ[illegible]

右　　權右中辨親長朝臣

判 はるさけはなさくら花の瀬河ゆきてあらしさそふ[illegible]

さしあふさくらあかとひてちりにさそふ[illegible]

日のかけまてもゆくとこさふやかくや右

なにしくちなとさそふる[illegible]

ともかのひあらしやゆるん
右ともによろしくはゆるを右のまさるへきに

よろしきことゆつるや

十一番
左 持 勝

左近中将為富朝臣

大井川山はあらしのさくらはなふけるそ[illegible]

右　　左兵衛佐永親朝臣

判 はるさくるおもてに山河の花ちるやさゝ[illegible]

山はあらしふかきしのちるとゆれはゆく

あくはきこしゆれとおもてふたしゆる

なやのかくしゆるん右ちうさけなとあらて

なつとゆつく其のあやまりかやゆるん

右はとしつまつといつやぬとのしくゆるん

しゆるとやし

十二番
左 持

右近中将経秀朝臣

浪のよるにしきとみえて龍田川わたらはかのせにちる紅葉々

右 勝　右近中将房嗣朝臣

山姫のそふるしほやそめせし袖のくれなゐの紅葉々

関白

左右のよしは浅深をわかちかたくはへりなんあまり

見しにすかたは侍りや袖の色にはよもかはりはとこし

右大弁中納言入道

心あるさま侍しきましはへりまさるへくこそや

まさるのよしはいつれともわかちかたく侍るにや

十三番

左 持　左近中将季春朝臣

うつりてはこのなつかしくともにかせに大井川かは

右 勝　右少弁藤原実右朝臣

ちりくる紅葉の色をさなからうつしてや深川のなみ

関白

左の浪は立つぬれは秋の山さこそといへとも侍れと

いつれも此歌の心をはきこしはへると題の心をや

宣とは見え侍らすなる歌もしはへらす大弁

大弁申て侍るよし申しはへるとも右はいはさらは

まてたちゆきもんとあやしくや覚え侍れ

右大弁中納言入道

右の歌は勝劣は見え侍らすなりにて

左浪こそ見えぬかつきもみちのもと侍れ

大井川なれなとにしてもといふもこれ侍るとも

のるに侍るやまて左の勝とす

十四番

左 勝　左近少将公澄朝臣

山川や木の葉をしくれるちらくさはにはかへらなり

右勝　　法印覚尊

雨はれやみはしくゆふかの空紅葉よりくれなゐにほふ波

閑白
左哥すかたのおもてのいま一きハとさしもそれ
ほと事はれむかしに見えかやはとかつくしく
きこえしかれと雨の事によそへてかなる世のなる
よはへてや大井の遊覧をおもひてつゝてハ
いさゝかたちいりて見えしる覚えて侍る存分
色のふかきに添さらにかはるとも色も
範宗朝臣中納言入道
いま一しほそめましてけるにや
西川の見ゆるせにかはるまるまれと云の右の
さしも侍るへくや

十五番

左　持　　民部權大輔行秀

秋の色ハさそふ嵐にいかならむやここの山川ちりもかなしく

右　　前式部丞源政仲

立姫のかさしの神ひてあはれなるそてのつらゝの川せ

閑白
さしさまなることもしは侍らさや詞のつゝき優なり
けふ右の歌もまた神ひてまた妖艶なる哥
範宗朝臣中納言入道
左ハ猶風情にて見え侍るや
左ハつれしくあるさまとみて侍る程にてあるへき

十六番　　暁千鳥

左　持　　宰相典侍

むつまてことはりにしほ風にさわく千鳥の声すみてありあけの月のまま

右　　式部卿親王

霧ふかき尾上の鐘ハかすかにてほのかにのこる有明の月

関白
左首の下句ハ寂しき月の新しく聞え
右ハ行列の霧よりもの寄りて寒暁の景
宜為左勝歟　是非之迷優劣難弁

左大臣中納言よし
何ことも月にまかせてとひおもかけもなほ
みちしらぬ人有明さしてまたの月にまかせて
それをしのひてゆふくれを待つしるしのなくかな
つれなくてなくならん

十七番　左　持
またふるさとよそにて有明の月をみてよそふかなしき

右　二條
さよふかきおもかけの月

しのふるかたのこゝろなくもまたうちとけて近江つくかな
関白
かつらきやかつらの月もさよふけてなく月ふるさとの月もなく
よそなるそらのなかめにて
左大臣中納言よし
さしもしらし月もあはれときけとこそくもまたふる月をかけてまつしき
さよふけてかりのよそなるこゝちして月にかすみのうちなくや
よそさかりぬるといふこゝろのなきにおもひやるかな

十八番　左　持
難波かた潮風さむしみるめかる月の入江にかゝるかな
按察使公保

右
たえすふくあらしの海の有明の月にゆくそてのうへ
権中納言資任

関白
此両首紛擾一寸まさりのうへとやおもへ右勝歟

夜ひさしゆめをやはるもえしつのね
元字并中納言入之
太宰帥有明の月にあくかれてけり
月はなれしやといひつきこえてこそれ
ゆふやみ月に入はくれをまちつゝやよ山の
たまへぬるしくぬるくまのりの月をみむまつはは
とにもかくにもはかなき身の終は春ん事や
いかにうきおもひをさしの篠にやといへりけん

十九番

左 持

権大納言家嗣

まよはれし宿をたつねの夜てしもかれてあかぬ暁の空

右

権中納言公継

おもひてよ我やこひしき心のうちにもしる色の月の兄

関白
いはかりもさきにぬるの名はゆりゆくれとも
かれてあくかりしつしぬるとをゆ問えひと
しくゆくつもや
元字并中納言入之
左の哥はつまこよひしくゆりねるとや

二十番

左 勝

太宰権帥實雅

さよちどり妻まちかねて暁は須磨や明石の浦つたふなり

右

沙弥祐雅

あつとりしくたこによるかうちしきかの月のおもはしきかな

関白
左哥は浦の浦つたふ妻まちかねてるとも妻の
心愛くまたしはゆり勝へきにやはへらん
元字并中納言入之
又浦の浦つたふ心こそ妙なるおもしろく侍れ

と万葉の古詞にすてらるく侍れハ可為勝

二十一番

左 持勝　　侍従持為

花の浪よるの稲妻よそにへたりつる湊のいちとなる

右　　大宰大弐雅親

有明の月とそ見しはつれなく別てやなく

閑白 左花の浪よるの稲妻あはれし侍るや

月とそ見しつれなき海のおもかけさしくハ侍れと下

飛鳥井中納言入道 句ことにさうたまさり侍れハ勝と申へきや

花の浪よるの稲妻あさまつき海まてあはせまされ

侍り又月とそ見しなつまつれなきなと

いへる心なるあはされや仍為勝

二十二番

左 持　　沙弥浄空

あま人の袖さへふかくさかれの入江のみるめなきにして

右　　法印堯孝

あけやらぬ月をせめてはおもふる独袖の露の身やよ

閑白 左万葉の古風とそいひつれ侍れとこの句ると

うちやりさゆるかりけりや右思ひ入ては侍れとあれ

飛鳥井中納言入道 せめてれ詞いさゝか深あしきるやおもはれて侍りしめ

さくらうしれ入江あさりけしいふのとついてそ

たゝ思ひ入しのちよりあるなしにしてと侍るよ

ちよみれはせめてハ独といへるもしハ優にきこし

侍まてこれをこそ為勝

二十三番
左 勝 持　　左衛門督持季
夜ちとりいりぬるいそや浦風のあしきもまへの浪の元
右　　左兵衛督有俊卿
浦風におつるしほひのしほやとかくるあさの月の元
関白 左しあしきはまへの元こその元なとはまさり
てきこし侍りしや
元久元年中納言入道 あけ来の元暁の元いつれも同科にや
二十四番
左 勝 持　　権中納言爲季
あくちとりもかつくに夜や有明のつきつきよとさそひ
右　　左京大夫経秀朝臣 ゆく
左明月はよこ雲をまちあかつきやとゆふつけさの実
関白 左方申ていはく十七番の歌と月出にはべりや
かつてまた申しつるにこそ同しはへりや 右ハ平仄聲
韻ノ二ノ病はへりとうたかひ申すはへれとも又さ
あまりなきやはへらん但左は勝まての事ハ
元久元年中納言入道 あかつきのはれゆくはへり
此番ハつまてさしもよろしくはへれとまことハ十七番ニ月
にてつかひけるにやもんとも右ハ十八番にもあつかひつゝも
侍しうへに右御はへらんとすみてあさはれ
二十五番
左 勝 持　　参議 識政實
有明の風のまきもこかはれて玉川の河もと浪てらす秋のそら

大　　散　　信伊忠朝臣

御風も立明の新さかりやいつれはよる鳴らん

関白　左右の詞河海のかはりてありけり

のほとにほたる心あるとおもひなれは

こゆておもふ御くもらへくなしけれ

とたまく判者はやうあるまとらけれは

つゝむへるなんとまうしたらひとくりは

しかしたる涙とのこしてとけかなるにて

なるは涙とつまてるへきるのやうにきこし

けり左のはなれ涙もことわりなくやし

けりや彼はよ御にあら井あらくとれたりと見

なりしけるこれはりけるなてなるよ給ましき

風ふけはまつ山の鹿もいつこにかなくやら

前大納言中御門入道　よしや見への愚案夢後の作者にも

左右同科にて持とのこしてといへるにや

くはれてたゝ花の猶かな

二十六番

左　勝

前甲斐守明茂朝臣

月さえて海のあまのこまやかにおもひけるなる鳴らん

右

民部権大輔行秀

さよふけていまは山のはの月くらくあけぬる元

関白　左月さえての字いふかしくへき事にて中

のよやのなかにてきこしけるや右はいつ

山のはにこれさそあまりしも神やはしけん

花山院中納言入道
たかのくといひとくあけぬるやいくよへぬらん
まうしいたるの勝へつかふしそ

二十七番

左　おお

さし中納言為冨朝臣

なりひらの宮のみさよ千鳥さへいさつまるかなしき夜

右

右近中将実右朝臣

有明の月をおもふことの日のひとりふるかなしき声

開白
さしおりひとつわのつらいとくきつきいかにそ
やきてゆふたつふあらはれのあるきにようう
花山院中納言入道
ゆふやゆふへあをてへておもふこくや
花おりひとりわすれぬ宮のとゆふかたりとおもひ
見つぬともきてもやゆかん右ともかし給ふ
ゆふくさあはらのあるといつはつきちのゆふとの
ちとりひとりあるくやあといつへいはとそりてや
まさかくんあすしへくるかな

二十八番

左　持

權右中辨親長朝臣

としはつるいまや別とするの秋のあきのかくれのなか

右　勝

左近中将季春朝臣

あら月の霧もおきつの風の海さことさしこころあま
開白
霧もおきつのとらひて海さこへさしこるとりて
いひまりてさこえゆかしや菩井の宮の時さるよ
まさしも何しけれはとまやかれるとりて
かかりをこころとさるやゆかん右ゆかしと給へし

宰相中納言入道
右まさりてくは侍ると申ところ思ひに袖の色に
あはれの色はまさりしかりよくはべれとも
いまや別とまつの袖のるまてはさらにまさると
申べくや

二十九番
左　持　　　　左兵衛佐藤原顕氏
有明の月はさらにあはれそふ色のこほりてあくるよかな
右　　　　　　藤原盛仲
さしわたるまた松原明やらてよるなるやまたかけはし
判
左も色のこほりてとくりては月はさらにまさしきや
よやきこえ侍らん右さしわたるほとの色のさゆく
心やすくみえて見るもあかくてはあらしとなむ

三十番
宰相中納言入道
これ書文はかなしかよのまへや
左　勝　　　　右近中将房卿顕氏
きよしや夜しも千鳥のなきしてわたる有明の月
右　持　　　　左近少将藤原経氏
有明の月をいつてみれは風にしたすゑのかつらのかよひ路や
判
若前もよしやこのよろしくたすまてはまさりて侍るとも
またこのかつらみるをはあらしもこれはさらかなり侍るへき
まやうなくるのみしきこそこの色をなすと
ようすこのかつらとかはなに侍るうり
宰相中納言入道
のこりの雲の月はなほ人まさりてや侍らん
さしもこのよる侍ることいはつまずもしたちもちなる歟

まひてハきこしゆへと委さるゝさゝれよのすゝ辞
ならミて淡ミ染つめるゝの月といへるの雨けり
おりひてはへ遠ハ左ノ勝とや申へりき

三十一番　遠嶺雲

左　勝　　　　　二條

風よきハしらやまとみくもゐる嵐の雲に富士の雨かゝらん

右　　　　　沙弥浄雅

ゆふハおかく代の山しらぬ山や猶しらぬ峰の白雲

開白
左の山ハ山あるてハきこしゆれとも尾山の心
見てゆるみやこハ題の心たしかなるにつきて
勝とみるへし
花園中納言入道
きよく見まえと婦しのおもひけまさんとゆるこゝろ
かつくしくゆふく山の家の雲をかりは
さるまゝならへし仍以花為勝

三十二番
左　勝
ゆふひかしやまれそめの花さそて出るいつか家の白雲
右　　　宰相典侍
大　　　侍従持為

開白
と相あきつゆかのいつくしくよこゝやハ宮にかよそかすの雲かけり
右のよこやしゆよくに雲の名のかつけるてゆり
花園中納言入道
左ハくゝあさりて姿も艶にゆれハ勝へきにやゆれ
右ハ心あるき侍にハゆゑくとしまての上にて[illegible]
さくら侍よ大様なるさ侍よみてゆれハ勝と[illegible]や

卅三番

左 勝　　式部卿親王

浮つりし雲より落る滝つせにうつるさゆる月の影哉

右 勝　　法印定孝

嵐たつ三室の山の月影やさやかに照すもみちの光

判白 なのさらてハさらぬ夜のさ(?)はる(?)とや

いさゝかくりかへしおかし雲ゐにも

前大納言中納言(?)

宇治(?)よりハ澄てゆくなる右の月影やさやか

きし大かたの月しるくハゆふさし雲しハさらに

宇治川のほとりの夜の月の影

さらにまてしゆくれハ月の影かな

三十四番

左 持　　按察使公保

思ひやたつゆの山の月も明くれハむかしの宿の空

右 持　　大納言実(?)

雲ハまよふにみてハ月やゆの山の嵐にはれて

判白 高間の葛城山雲中の月の影も

持なる勝劣しがたくや

前大納言(?)高き嵐の雲の月影も

卅五番

左 持

さらぬ山さらぬ白や月ぬらして嵐の初雪

右 左大臣実(?)

前権大納言雅(?)

判白 くらぶ山はかり雲の月の嵐をこえて

左方(?)の心詞勝(?)くきこえて大方の勝(?)

たゞりとはなれるもとよりのやうにてやといふさへ、
おもひつゞけたる結構どもすべておかしくはべるめるとや
とへかしん
あれしまたいつまでこの秋雪といひおもしおのこは
まつりうし見えるとはらいつまであしとは
まつたき玄ノ判者又同科にや

三十六番

左 持

はるはあまのかぐ山雲つもりたるのむらきえしも

大宰権帥実雅

右

風さやぎ松かきくらし嵐の雲にへだてゝてる山の桜のはなえ

権中納言資経

このあまのかぐ山又まどふみえしはをしかいふ

そやあはれとよぶゆふこゑとよもしはれはるかなるを
あはれのかぐ山といひくはるかなるまゑのいの
あまのかぐやまうへの霧はうち沈言とみえ
はるかにつゞきてはれよそひはる大言は絶望と
和しはるこの歌もいつしく一決すべきやはりなん
大かたくらし嵐の雲よ山桜の松まよの色なきも
神さる事にはなれども山嵐雲にみゆくかも
侍るうち家の風や松本まさるべきと思ふ給へ
られはまくもし勝かたくやはしめ

卅七番

左 勝持

一 少将隆宣

嵐さそふこの月さそはるゝ風ぞかくは雲の名もあれ

右　　左近中将為冨朝臣

よそめにはゆくかたもなきとみえてつらなる山のみねにかゝる

閑白　左歌さゝら浪見えてやすらかにはべり

右はくもゝかけはしにやたぐひみえすはべるへ

てをとらずとぞ

前大納言中納言入道　左の文字優なりときこえしはかるに

見えたる雲の文あるゆゑに猶ひかれて勝と

てありぬべし

三十八番　　持

左　　左近権中将持季

峰の雲はやまれいくすゑもみえて嵐の雲のすゑる

右　　左中将兼房朝臣

まむ里の二十日のみちにあしひのやまゝの嵐の雲

閑白　左歌ゆかりとふかきやうにみえ右歌のみちにやすみ

前大納言中納言入道　のふのこゝろさしあひてみきてゆらしとや又ひとつのあ

さし出たるあしかるよしまさるべし

三十九番

左　　持　　権中納言家季

何気つる大井のかはせのしら浪の岩こす音のせゝの嵐

右　　右近中将公澄朝臣

かさゝぎのわたせる橋にしもやおくかへすかたもしらぬ夜ぞゆく

閑白　前大納言中納言入道　左前の御歌やうゝてかなしき右の歌のあや

左歌はまことに心ありて右歌もおもしろき

ぬべくや左は勝りぬへん

四十番

左持　〃　権中納言公経

さだかにはみえざりし春の夜の月もかすみのうちの雲の晴

右勝　左近衛権少将有信朝臣

閑白

夕日さす山の端かすみて見えずとも霞にかすむ春の色かな

夕日さす峯さへかすみて見えにける春の色をも見ゆるかな

閑白

霞のうちにながめしもみえ花のかげにかすみやまとの山かな

三十番とけふのさやの中山ともなはで見え

かりけるも右歌は中山の春の景色ことにさまことなる

かるかなや

左右又勝劣なし

四十一番

左持勝　参議政賢

花のかをかすみてこそやみよりも吉野の山のかすみの色

右　民部権大輔行秀

閑白

きよしやまさしく雲の籠めたるあしたの山かすみの色を

月よりもかすみにやまの山のかげにさきけるかな

又吉野の山の月にも思ふ心と猶ながめける

花ひとつにもかすみとやいふらめ左方こそ見えける

をかしとやいふらむ太郎の心を見るや

あらざりけるこの心をかさねて一首の歌をとまれ

勝にもならざりけり

判者の心にまかせて左右とやすくにかなふべし

閑白

右はやまと心のおもしろくはまさりけり

四十二番

四十番又あらためて左の歌合科とや

左　持
前甲斐守明茂朝臣
あかしかたやあくて都の白雪は浦つたひ行舟にくらへつ
右
権大中弁親長朝臣
はれしは雪のしられやはあつら浦のかすむや雲のかた寄らむ
判云
右浦のきこえてさたゆるまやたたぬかしき
いまたしらてしつもさすへし
うらちあらしいつまなるはや浦つけいさもう
まさるともかへくや

第三番
左
教　信俊忠朝臣
うきやや月のかけまつ明かの雲みすの白妙
右　勝
右少中将實文朝臣

あさてよるも雲はゆるし時風のあさちの麻や宮つらん
判云
右方うつきは山の風やめる月をちはら浦のいさなら
きたにくかや右方三句こそよりくきこしはてを
又うつにしうの浦そや勝へこそいはれて
きしかれくきをたるあといへつわらなあしくもへ
ほと右いさうさあるらは雲の勝にはゆらん

第四番
左　勝
きし房統永親朝臣
ふくる夜に山えりの雲のあなわらて月つつ麻の白雲
右
右近中将季春朝臣
はれ雲のかかる麻の白雲はつりうき明山と見へてけはへ
右詞も〇の初句とありてれはりはうく。

左は雲ゐる山のはなとてみしもゆ
かしやまたはつくゆかしといひし波羽左は
まさりはべりなんとし
宰相中将よみて侍らん
雲かと花とを羽山はみつるにやまつるは
くらへ山をはあらはなりともやと申へし

四百五番

左　持

みよしのゝ花の白雲つれなくは　右近中将経家朝臣
かすむ月さへなかめしもせまし
右　前大弐源政仲
ゆふくれて鳴きつる花とあはれ　なるけき山花のをかの梢に
判日
左の歌は上の花の心みてゆうすなるしたかひの
歌つくらぬかなりとほのゆかしやなやいもの左歌まて

にたえまなき花の雲のはてなきをまたとしく
花とあやまたんといはれ侍り又の左家
の歌たかさよの空のあらはくくれあみえやとく
このなの花あはれいかなにやすれのかれそくよ
くらかれたる花の歌ともそれれ侍
宰相中将よみて侍
き云ふつまと雲ともなまへるのきにぬり
侍りぬへしや

四百六番

左　勝　忠良卿
おもふやあふ花は我と海にならんとにせよりゆつきはる
右　或親卿讃岐
よもすかは月夜の　左歌の勝
村さめ雨露おりしにれしもあふは月やはれゆくと契る。

（冥白）左右ともに源氏物語の中をおもひて艶は
まさりはべれど左の歌猶すこしあはれなると
やうにてやみなん姑娘の心よからぬひがら
む左にまさるべくはおぼえ侍れど左はなほ心ありて
きこえはべりや勝ともさだめがたし
（元は中納言入道）左は世をうしと人やつらからんといひてぞ哀なり
右は思ふも恋も哀あはれなるといはまほしかりし
ゆゑとまでいはれし光源氏の心と思ひ
なぞらへ優にきこえ侍れば勝るとや

四十七番

左　持　　二条

たえはつるよそのちぎりの思ひ出も涙なりけりなげきとぞなる

右　　権中納言資任

うきよそにちりなばおもひちれ思ひの露の風そよぐ
（関白）左は源氏の心は落ぬれどもよはしくきこえ
侍り右もまた明らかなる事一ふしあはれ
なるとや心姿は詞ありきてよし猶節はこひと
しきりや侍らん
（元は中納言入道）左は勝ち侍るべし右はふるまひてこそなさと
いふもまたはよろしく侍り

四十八番

左　勝　　宰相典侍

あらはれてのちのうきなやしるらし思ひはあさき世の中のならひときこえや

右　　沙弥浄空

せくりと思ひてこそわすれしか夢とあはぬはなをぞうき
関白
左方歌よろしくきこえ侍るを右のうたもことはりしらひて
あつせみのあさしきやとはかなくおもふなほまさりて
とりあへぬくおもしろくきこえ侍れ
右の歌猶よろしくこそ見え侍れ持とや申へけむ
元久年中納言入道
このうたはすこしまさりて侍ると申
せみのあさきかやといふ事ことにきこゆ
つくしきこえ侍れは持とや申へくや

四十九番

左 持　三位侍従有家朝臣

あつやしき渡のこの比ころまたこそしらねものを

右 勝　右近中将経家朝臣

比ころなれは思ふ事なくなのみこそまかせつゝ

関白
両首之得失相交勝負難分
元久年中納言入道
右よろしく侍るへきにや

五十番

左 持　太宰権帥実宗卿

人しれぬあさきにゆるをまた渡のつきにしるあらはなく

右　民部卿大将行秀

渡川人めつゝみのみそきこそはあさからぬのしるしとて

関白
両首の渡川渡深浅よりて侍れと川おさ
またおもひかきくらしやかへりつゝみそれ
あらそひさへこも侍れともしるしあらぬ

ゆゑんし

（左は弁中納言入道）
さ右の詩句とつゝみゆかすゆかりおなしとや

五十一番

左　持

参議雅賢

入り待てあかつきの雲の面影しほのうすくもやまかぜ

右

左兵衛督永親朝臣

うすこほりとけてこつらし山の雪のひまのありあけ

（関白）
左つねのことくゆかれと判すくゆかり右のさしも

めつらしきうちやゆかりやたしかに二句つゝく

しかるといふ事にて侍りいつくにもゆかりなき事

（参議中納言入道）
さらにありけるにいるとなかなかのあしからぬ

くあるさまなれはまさるとやいくや

五十二番

左　持（勝）

敦

信輔朝臣

いろていあらうちよにみえたるなかになるべきゆかりの

右

右近中将房嗣朝臣

ましひこふ山家をしむかしの我中のあはれを見よかし

（関白）
さしう後拾遺集にいはつゝけられたる

あさやかにてやかれとも月の出るかたりて

ゆかたまくあはれなる事のうへのしとて

あはれんとさしていふともいはれしてあると

ひねりかなれいといふ人の事といふをしも

ゆかへのかやおなしいのちしむかし万葉の詞よ

てかるあやうくひらくゆかりしかにやたし

右の歌ハみえしもとをてなとハあなかちにあなか
也とも申侍れとこの歌ハもとりてあしく
権中納言入道
きこえ侍りけるにや
左の歌ハみえしもとをてと云風情不審
恋の心にやときこえ侍りしかは以左を
勝へきにこそ

五十三番

左 持　権中納言兼季

思ひかねいさよひきつゝ帰るあかつきに月のみ残るあけほのゝ空

右 勝　左近中将季春朝臣

あふ坂の関の清水は清くともおもひかへすと人のよるらん

開白
右あふさかの関の清水をよそにあひみむとなとひろかつとなと

侍りときこえしくそきこえ侍れ勝ときこえ侍らし
権中納言入道
左の歌ハさたにしそときこえ侍れと心のみえすと
申すこし事ふりてや侍らんやうにやちかく歌
あくハ侍りとおもふにや

五十四番

左 持　権中納言公経

よそにのみなかめしまゝにひさしくて今ハあふ坂の関

右　権右中弁親長朝臣

あはれなる恋のかよひハ逢ことをせめてせつなしとおもふさ

開白
左のあふさかしあふさかのよそにみえさとあかく
権中納言入道
勝へきにや
左のさすかしゆくへきやうやひとつへのしるしこそ侍らん

ふしておれとこその様なるしかくやとへるらん

五十五番

左　勝　持　左近少将公衡朝臣

君ならてあふ月日をもしらぬ身ハあはれにこそつきける

右　蔵人式部丞源政仲

こひしさは見しより事にあらたまりつきせぬ

右あはれつきぬるはことにやかなしき中の

中のあはれにてくやれとうらみてきたる

くらへても侍なるとて勝負にて侍る

ときにあらそふ由しけり

五十六番

左　持　侍従雅為

きしあふ雨夜のきゝや鳥なの道ゆくらん人よりかはよりこ

右　法　戸部尭孝

いつくにか宿りもとめむあやなくも雨の古きのあるこそあはれ

関白　源氏見んさるうすゝき根の事とこそ後

成てなるうしもけしき山霧のはなる月の

ひとよりはやよおもしろくきこしけるとつきて

左はうき雨の夜の事もやゆかんまよふ君なれ

ともふかきいそかしくのとそなりしくやきこえ

ゆかん右は文字らつかれ中君の事にもや見

きこえいはぬとさめ世しるしあそしてふ

くもりて時雨しはしつれしもしのるとの

とひくるれさるらうして残りにめさうもなく。

無れくとゝきこえ侍らねとよろしくおもふに
しやゝかしけれ
（光秀卿中納言入道）右のうたこれも優なる風情のくさかりころも
とりて左はうたのさまくるしくはなれとも
ひこしくあくやうに侍らしや勝へきにこそ

五十七番

左　持　　按察使公保

しら雲ハ又かやうにとりとみの世〻の山のはの

右　　少将資雅

しらつゆしくてハ世のわかの夜をつゝめぬ

（閑白）さハ上句おかしく下のるよろしくきこえ侍り

侍り又すゝめ勝しや

（光秀卿中納言入道）左右ハふ山とあやうかりて色をんつみまする
さうちあるやうに侍れと右のうた優なる侍らく
色し持の様

五十八番

左　持　　大宰権帥実雅

よるくもの心のたえくやまち関守も

右　勝　　左近中将為家朝臣

あつちらうつ侍しあひく松ハきのくものひまをあなつ

（閑白）左方伊勢物語にうらしまのかくへんとして
ア侍るは関守のおもひなきをきゝてはさうらふこゝろ
あくやうにハきこえてはと題の心もおもひて
うるひ侍るかしや左の心つゝ中を勝つべきにこそ

ゆふすゞみなくなきとやゆれへゆくとすゝしさそへ
そときゝてゆくゝなると縁なると花麻貴すや
ゆふしあまり秀句しゝ侍とかれゆとたれの

宛名弁中納言入道

右 月つきゝ侍つゝそ縁とやへきこや
花いの関守なあしかよのすゝしや

五十九番

左 持　大夫典侍家房

ひさしひさかたさなしすゝかりしつ桜井はよしやさらし

右　左京大夫持季

いつせん便のしさなら此本しつゝむかしひる此秋の風つりら

開白

宛名弁中納言入道

左のさかおかしかよのすゝや了あはね
右ひさしひさかたとゆふしそたなかゝひさしひ
えたろゝきさしゆく孫右さんいさていふそ
こそしそうしれ侍至と有りゆしるるしぬ枝は
やよりくねとらへし

六十番

左 持　権大納言家経

さ秋ゝつくりしき秋と人き風てあ坂こゆる岩はし実

右 勝　前甲斐守明成朝臣

あつ坂の実へりそぬ正縁し人ぬりつくゝし新道

開白

ことしにあふさかのせきとよまれ侍るをはさて

宛名弁中納言入道

左いとこゝろつこしろくきこて侍りたゆらぬらし
此番のあふ所いの実し縁勝ぶかる明すや

六十一番　但馬守年

左　　　沙弥祐雅

松かけの杉と六十の老の浪かそてたれぬ数をそへても

右　勝　　法印堯孝

七そちやみそちもちかん白川の浪よりこゆる杉のよはひハ

判（関白）左ハ若菊の杉と六そちの算をかそへ右ハ白

川の浪と七そちのよはひをとけり言の縁労

なきまへしくをミれハみつからの述懐よけり

これハ君とふをもやとおもへし侍らすつかへすく

浪より立かへるハ彩保のむらし

あやそこしうよひて侍らやよくしらきこえ侍れ

持にかるへきにや左右同く縁の字

を除く侍らぬ

（飛鳥井中納言入之）

大白川の波とたちそはん杉のよはひのよはひまても

さゝ浪のよしやまてともとちすやゆかん

六十二番

左　持　　　式部卿王

君か代のゆく末とほく思ふかなあまたをこえて二千とせの松

右　　　権中納言公経

神代よりありとしいまハ以久をせにまつのみの杉の松

判（関白）左歌ハ二千とせといひるおもひやりたゆなん

右ハ万ちとしかすれとなりてきこえ侍

やうさかなゆへきにや

（飛鳥井中納言入之）

左ハ君か代のゆく末とおもふあまりのふ

めつらしゆかき大丈させてよハゆかしく侍と

難なくきこしはれはおなしさまにや

六十三番

左　勝　　宰相典侍

君をいのりてかゝらん松の風こゝろの色のつきぬちとせに

右　大宰権帥實雅

けふからは嵐に松さす君の松の葉よ千年をかさねて万代
関白
岩よ松さす君のすゑの雪あまりには木末もなし
やしほやや雪風をのみとものかけるほとも
元本宰相中納言入道
まつりてはるかしくはりけれたつる勝
左のうたしつてはなくときし松のこれみとり
のかけもかはらぬ世はまさりてあらんことはりにこそ
川はへきあるまくはれもしる勝

六十四番

左　持　　按察使公保

かすかのやふる枝にこそ山の松しにいく代のちきりをもとすらん

右　左兵衛督雅親

あまてらすよはひやのこる松の陰君にゆつりし千年の声十かへり
関白
左右ともに藐姑射の松や万株の陰いつれと
元本宰相中納言入道
たらしともわかちかたくはへりや
右のうたこそや山の松のみいつまでもとてこゑあらく
はへりおなしさまにや

六十五番

左　持　　右近大将実量

みちのくはいくよせのみかけの松やさかえん君か代の松

右　　權中納言資任

むかしたに梅かゝとめし松陰をさてやくらせん住吉の神

判 住吉よりは松とりし神風にたちかへるやまとく
たゝくおもとこそへし

（左少弁中納言入道）ありしのかけの住吉の雲にくせのといひつくとせら
こゝろとりよろしく侍り

六十六番

左　持　　權大納言實徳

おひそめしもしやまたみむ松かけを岩の苔にて結ひきなくく

右　持　　沙弥淨室

わかよりひたちさかえれはみきの山松もかくいくよのちまてもあはむ

判 これこそ山水郎の例よまるせて左右持為

のことをつけ侍るやとこそ侍まてと右合は神
國にてはその事は負水よさらに侍りしとた
やとおもひしけれとも右の哥はまさせてお
とさるゝあはれ侍る也

（左少弁中納言入道）さて松のむかしと苔のいはほよみ侍る心おもしろく
ゆりし侍るとたしかのここそのこといひて月のに
といへるふしとおりひく神よりひさしきけさせ
みとよろしく申し侍れは持と申へし

六十七番

左　持　縁　　左近中将為富朝臣

ちよろこれみよりのおもいは風よふ松ハやるかれ萬代の秋

右　　左近中将季春朝臣

かりにくらされてゐたりけるしいそねの松に苔のむしたるまへて

閑白
右も又ゆうに勝劣かたくや

元字并中納言入道
右はひしとてあしく侍るにやとみえ侍れ
かれやこや井の松にかよふとこそさうらふなれ
もなくてきの勝にて侍るにや

六十八番

左 勝　権中納言教季

十かへりの花のあとまつ住吉の松にかかる藤なみの波

右 持　右兵衛督藤原俊朝臣

うごきなき岩ねにさきて松のみどりのちよのかげ

閑白
左も右も姿詞よろしく侍れど十かへりの
花のあとまつなど一ふしありてきこえ侍れば

まことに侍るにや侍らん

元字并中納言入道
きみのいづれをともしく侍るとたしかにあはさは
よきこえ侍るにや

六十九番

左 持 勝　参議政賢

かねてしれ千世ふる友や苔むして見ゆる住吉の松

右　左近中将経秀朝臣

あふさきる神代のむかしよりさだめて住吉の岸

閑白
これあひあひのまつとしの久近きほどくて又すぐ
のこゝろはいつもうらくくはぬや

元字并中納言入道
左の歌はよはい高く松のいさをひてもし苔よ
くや住吉の月とひさしくいろよくなりけるとて。

ゆくやまさき影なくはなしよりて紅ます

七十番

左　持

限なく年をつもりの浦の松はいくつ世をかへ知らん見ん　　左衛門督持季

右　　　　散　信伊忠朝臣

色にあひまさや十かへりの宿の松むさくはや万代の色

関白　左右ともによろしくはゝのうたにて侍りしにのりてはしなを

の字つゝく左の初句しきいくやゆかん

左与年也加入あへたく　よろこび年とつもりのとあるへくや左と歌の文字

きこよりすゆかれはあさまへておもふへし

七十一番

左　持

　　　　栄田中務少輔明茂朝臣

君か代の緑の山の松かけにあつまるもよの世は色かはるへし

右　緑　　　　たゝとめて左近朝臣

ときはや山の千世のさかりと松はいつまでもまつとやちよへんとすらん

関白　左はときはや山の麻きやれ緑へたゝかたるらや

左与年中加ふ　たれあつくなるもみやは色あへしといへるや歌とも

思ひくゆかん左はまさりゆかん

七十二番

左　持　緑　　　　左兵衛佐永親朝臣

あつきみるゝけさくもれは松の緑の間をいくよの代かへん

右　　　　民部持大輔行秀

君か代はうけ世よしあらんさかえたるちよの岩ねの松と契て

関白　左右のみなれのはしとれともきかれさうらふ

おほつかなくはりたえてかゝりのなかくいはなれ

〔?〕中納言入之

こゝよりはすや又結句と涛するにいかゝあらむて

右の歌もさにこそされたるにやとありつき

てきこゆるやうなれとも猶ことはのにそ

まするにと聞こえ侍るにや

七十三番

左　持

さよ月のやまのはいつ汁わかちらん

持大中納言長能

右

松かせもやまつのさかえをきくらんのこゑ

関白

さしわかちられ

右近中将房卿朝臣

こゝろみにもあはれけりなかたのまつのやまの

〔?〕中納言入之

のかれてもおのかうへにもしらえしはかなや

いつれもあしからすはへり

七十四番

左　持

まれにきてこゝやれる山の花のみきみやちよふる十かへりの松

右近中将實右朝臣

右

藤原或説通源政仲

年をへてきくへききりの松風の

関白

そこやれる山の花のみゆるほかの雲の色

〔?〕中納言入之

又いつまてとやいはれまし

はるやのやまのまつのけもしのまつのいろ

いつれもおなしほとにやはへらん

七十五番

二條

左　勝（持）

年つもりたかくひさしくなりにけり緑の洞の松乃若葉は

右　侍従持為

以久世重くさゝ流は数二よりまつをさす松のおもかげ

右哥さゝれいしの二葉より松をさすまゝ川の

なをとくらゐ一帯しるしておもしろくは中々しらせ

左の我さくらひさしきなりにけりかはりぬる松

の若葉いかゞと御たち上古の風をのみたてまつる

よそほ松の千とせをや申ゆかんあまりこの末の

世とつひあをしこのみちかはらぬこゝろもと感情

きこゆるかなしくて緑のはじめゆるく

持ちるあひせは寛平の御時のうたあはせの右のつゝひ

をむかしより天暦の御時からもはけのときをきて

きこえしかれてのちありしのせはかくくしこと

さてあらはれてよせしてこのおもしろくあし

さるにとやさとありはさりとゆふくたなりの哥

を判するはこれはさまひるひとにらてしとの心あり

くもりし次第にてもうらかすにきてもゆるゆるり

あるとまたもしのあはのよしあしとまうさは此

山の井のゆくはあさはとくとくはいまむあり

あるまでいまきはゆるみのあはれもとうけ

たりとのみてもあはつけはかしもあるすゝ中

葉の林のみけにあらてとにて詞よきすゝさき

花をまつれいくもやこれこせとかられく

よろつのまつりことあつかりまうすといふ人たちは
もゝしきの神や井の月ともゝかのゆふへの風乃
そこの人まうの家録ときあしたいまを撰
契のあふことにもし君と万葉のこゝろ
さむ事とのミこそまつたふるかのいにしへを
うらみておきくちぬるなさけをたつねて
まきうつ[illegible]のりよのうつよつくるに
あさか山のあとをたつねてふかきあさきをわかてり
[illegible]
の判つかまつるへきよしをことにおほせ
まつかくこれをとゝくのよせられたる
ほとゝきすしてまつしやきたつけはれて

これらうけたまはりてあつむる[illegible]
まんえうしふにいれるうたはこれをのそかす
これよりこのかた七代の集にいれるをはこれをのせす
へくみよりのはしのせしうた代々の[illegible]
のさかへをよろこひはなれておもてをかへす
おもふにあれハよろつの事とうしては
ひらくにのちのはなのあさくれはとこしへのな
あし

よろつのうたのうたのにいせのほかのかせにも
[illegible]
見ゆるは[illegible]
はるのつきのはなに[illegible]

宰相典侍 勝四持一
負四持一

式部卿親王 勝一持一負三
負一持三負一

右近大将實量 勝一持四
負一持四

大宰権帥實雅 勝一持一負三
負二持二負一

沙弥浄空 持四負一
勝二持一負二

権中納言資任 勝一持四
持三負二

権中納言公緒 勝二持二負一
持四負一

右衛門督雅親 勝一持二負一
負一持四

二條 勝二持三
負二持三

按察使公保 持五
勝二持三

権大納言實連 持四負一
勝一持三負一

沙弥祐雅 持一負四
負五

左衛門督持季 負一持四
負一持四

権中納言教季 勝一持二負二
持三負二

侍従持為 勝一持二負二
負二持一負二

参議政資 負一持三負一
負二持一負三

前甲斐守明氏朝臣　勝一持三負一

勝三持一負二

左兵衛督有緒朝臣　勝二持一負三　勝二持二負一

敬信伊忠朝臣　持四負一　勝二持一負二

権右中弁親長朝臣　持三負二　勝一持三負二

左近中将為富朝臣　勝一持四　勝二持二負一

左兵衛佐永親朝臣　勝一持四　勝三持一負一

右近中将経秀朝臣　持四負一　勝一持三負二

右近中将房郷朝臣　勝一持三　持三負二

左近中将季春朝臣　勝二持二負一　持一負四

右近中将実右朝臣　勝一持二負一　勝二持三

右近中将公澄朝臣　勝二持三負一　持四負一

沙弥堯孝　勝二持二負一　勝二持一負三

民部卿大納言持秀　勝一持三負一　持三負二

蔵人式部丞淳伴　持四負一　持四負一

歌合　門東　康正元年十二月廿七日

題

庭残菊　水鳥　松雪深　忍久恋　祝言

左方作者

女房（後土御門院）　勝二負一持一

右大臣（教房一条殿）　勝二負三

式部卿親王（貞常伏見殿）　勝二持三

入道前関白（持通二条殿）　負三持二

大宰権帥在貞雅　勝一負二持二

入道前右大臣（前三条公持）　勝一負一持三

左近権中将雅康　負七勝一

左衛門督雅親　負五

前大納言正意　勝三持二

右方作者

准后（兼良一条殿）　勝二負一持二

前内大臣（侍従実量）　勝二持一負一

右大将義政（大将軍）　勝四持一

前大納言資任　負三持二

権大納言親通　負三持二　権大納言勝光　勝二負二持一

沙弥浄空　勝二持三　右兵衛督為富　勝二持一負二

前大僧正義運　勝二持二負一　権少僧都忠雅　勝三負二

左方勝十四持十六負廿首

右方勝二十首持十六負十四

讀師　講師

判者　左衛門督雅親卿

一番

左勝　庭残菊　女房

あひおひのよはひはしらる残菊や秋の冬まてにほふ君か庭

右　准后

冬ことにさきのこりけるやとの庭の菊もとの軒端の秋をわすれて

左哥のあひおひよはひくらふる菊の冬わすれ

こそよろしく侍らめむさしのやさしく侍り右

哥はよろしくてあまねくむすひつけてやさしくあれ

ともに左まさりて候へくはいかにも左為勝

二番

左　関白

右はふせしくれなゐに霜は又うけて猶花なりし菊ぞまさる

右勝　　右近大将義政

そまりて庭のまがきの霜にしほれしもさらに白菊

左菊のいろうつろふは猶のこりけり花なりしにこそ

羽はうつくしかはりなんと田一こそこし

右籬の霜にこそはのうつる菊なれ

識まきらしくちこそ勝

三番

左勝　　式部卿親王

みし秋の花はうつろひゆく霜に又しほれぬ庭の白菊

右　　前内大臣

萩の戸の花はうつろひぬ色をしけてうつろふ菊の庭

左菊はうつろふく霜に多くあひてのこる

うしみてゆり　右萩の戸の花の色には

みへる菊まなつほかにもしるくゆ

こと左勝さかりとありもしるしく

四番

左　　右大臣

雲の上の月にはまちて夜星のかげのみ庭の白菊

右勝　　前浄

ちりまでも紅葉の下に庭にぬちるまで白菊

左歌そのうへ上まく文字菊しく

言をとりて折る菊にはしひてけをあけ給
ふる日もまたこそゆるしたまふにて宜しきなし
ゆるしては仁源氏物語の紅葉の賀の巻に
菊をかざしてかの紅葉の菊を折て源
とくもやし事ありてかうしも哥の指傳は
宜しゆるしは為勝

五番

左 持　　前大僧正満意

庭の面にあさるる時も知らぬをぬしさへ見えぬ霜の

右　　前大僧正義運　　白菊

おひおひてつゐに庭も菊の名を残す菊そ咲けつ

左のこれは時しもこそしらねも古今集の哥に
こゝろあてにをらばやをらん菊の霜
まよはせるむとして白太の花を事ゆるは
と哥は十まで二つ三つ持なりや

六番

左 勝　　入道前内大臣

花とさへ時雨の深き秋の月節の菊の冬そむるかな

右　　前大納言資任

木葉さへつもりてつる露の下に秋を詠む庭の白菊

左の時雨の深き秋の夕はかやうにも下るなるべし

木の葉の下へは木の葉さへの色事やで下る

枝葉下にありといふもまたもみちしはもれ
木の葉に風さそひゆくらん

七番

左　　　　　　　左清水権指観

今宵へおよ花の所やこそれへの君か後も白梅白菊

右勝　　　　　　右兵衛権督為富

菊のこく父も思ひも君か為秋のまつよりて九重の庭
左庭のむかしもたえしかは寺をもつとめおもひて
うつろふ風さへねかふの津つくもかくれや
右霜の下に秋そのこゝろむもそへしく
まつらしゆかぬる

八番

左持　　　　　　大宰権帥實雅

霜おかぬこの一本やうゑぬらん後も見ぬ庭白菊

右　　　　　　　権大納言勝光

たえぬ菊風の花さへかほりよをせの齢や庭の風さそふ
左にも一本やとさぬるとはいひさそひてのちまで
白露不まるいのちのあはれと右又おなし
白菊ともなみのやもまりぬ風さそふのよの例
なへてとも見て作るのもそへてつくる為ね

九番

左勝　　　　　　権大納言公躬

君かよの梅も菊も庭のうちに猶あさましくまさりし菊の一かな

右　　権大納言親通

白菊のうつろふ梅の庭をとふことも又咲花のありとしもみつ

右哥のさまよろしくまさりて見ゆるをなとあはれひは五七

ゆるさるへくもあらぬものをむすひとありぬへきを

と指くへしともむつかしくゆるされていはて以

此の哥は古今集にも多くありなんといはれ菊をとも

一首にも梅くさひしきかな花にとしみ也と

ゆるさんも一首のむかしの意をとなくや絶えぬ事

よろしくわれもせられぬへきいつれ猶もしせさるへき

ゆる右にも勝ぬ事なきもゆるしぬへし勝歟

ゆるされなんし

十番

右　　左近権中将雅康朝臣

秋とてもしら菊の月みえて見ぬへしうつろふ梅の菊の花の

左勝　　権少僧都忠雅

うつろふ梅もまたうつろはぬ色なれやいつれの庭の白菊

右哥ひと月をうつろはぬ梅菊なかともさしたるうつろふ

わかさるとも猶月をいはぬめる

ゆるされても猶はうつろはぬにしもあらぬと

左哥うつろはぬ梅の色もうつろはぬなれと

勝とも又たし

十一番　水鳥

右　　　　　　　右衛門督雅親

月のこる池の玉藻の庭のおもに吹しく風やをしの諸声

左勝　　　　　　前大僧正義運

汀よりかへる浪にしみ池のおもにさえ行はの鴨のなく声

右哥の心しりかたく侍にや左哥はよはの鴨の声

なほ汀やかれなん蘆のはのよりも志賀の浦泊

しはし哥のかたに於りて古へ申やう歌ともに池のかをり

詠めるまゝ水鳥の聲まさりてきこえ侍れ

右哥は作者ひとつにしかれたる所ものにも侍りや御らん

ありかたく侍りていつかなる閑の月かな

まあ難しきやうにさる侍れはさく侍らん待れ

以のよ為右哥は度侍し

十二番　風

右　　　　　　　大宰権帥實雅

風はらふ樹の木末はさえぬ池のおもに

左勝　　　　　　沙弥淨空

かはりみなさくそ思ひのなきを水わけたる風

右哥さしたる事なる難もなし御や

小野小町はすむ人もなし見えとこさ筆風と

以つ哥のよしう里中思なきてみのし侍れ

と後成て云る風ものはなしいかゝおりしはる

といふ事も撰集に入られ侍りにや
吾心なる右はまさり侍るへし

十三番

左持　入道前内大臣

わか鴨のさそふ入江のみとかけしはね水の音も風もさけき

右　准后

鷺のゐる…我見しのくもりに

左の鴨の…入江にあまりにさし添

左すこしかちまこの風情集のあまたにも
見えとも…右の鷺歌
手かれ…侍る…

すゝしくあるむかしく侍るにしも吾の
猶佳勝手にかれ…

十四番

左勝　式部卿親王

松も陰なる波の床の…なる
右　権少将雅
池水に…
さま…
…右も…
さ陽猶…以左為勝

十五番

左　　　女房

衣さむしとゆふやねやの板間より床のさむしろ　独ねぬ

右勝　　　左大将義政

霜こほる鴨の羽風ひえぬらん人かよふ道の水もこほりける

左歌、さむしとはゆくらん[illegible]のるすゝゝ

あまて[illegible]道のすゑ[illegible]續拾遺集に

[illegible]衣の袖よりも[illegible]ゆくらん床

[illegible]のひとつ[illegible]しゆくらん[illegible]むつまり

撰集抄[illegible]いま[illegible]世にも[illegible]

[illegible]難治にゆくらんや　新古今集の

古風[illegible]姿するとき[illegible]のあ

十六番　　　左可為勝

左勝

よとすゝ床も定ぬ水鳥にこゝろゆるして[illegible]

右　　　　前大僧正慈意

右兵衛督為富

うきふしも定め風吹浪よせし[illegible]池の[illegible]

右歌も[illegible]の[illegible]貫之の[illegible]ける[illegible]

[illegible]二首とも[illegible]や　左床も定ぬ

[illegible]むしろひゆらしとはゆるき[illegible]

あつめるいさ[illegible]左の[illegible]

十七番

左勝　　雅康朝臣

こゝろえぬ露のまかけのかるかやにいとゝこゝろはみたるゝ

右　　権大納言親通

ふるさとのつゆのおくてのかれはにもおきわたしたる霜のしたのかゝる

右歌集にはひたしのさたはのそれ表なる

うちも霜にまさるこゝろあるにこそ左や

まさるへしとて勝侍らし

十八番

左持　　権大納言公綱

あはれなる秋風のふきわたるよりやまのはのつきかけのさやけき

右　　前大納言資任

何とかく秋のよのゝはきかえにつゆをきてさむしろの月風のやとりけん

左上句不審下句華美　勝劣難決也

十九番

左　　右大臣

山川のみなきはしもなりとも川瀬の月

右勝　　前内大臣

秋の月やとりてかすむ山のはのおくのさやけき

左不庶幾　右　無何難

也勝へきにや

二十番

左　　　　　　　　　　　　　　　関白

芦家の宮打ちのかくしほ風にたつさなかのまろ

右勝　　　　　　権大納言隆光

葦鴨の羽かひなくそて山川の音はかへるにひま結ぬ

芦家の宮とくしといふはさらにいやしくもへぬ

ゆめ思ふかさしは御らんの事は中に二る霜打さやく

てつれなるまゝにて御らんなり風とあはは

又左の宮常こと詞わしるものゝ羽わかり

まに風情と聞えさんとのこゝろあるまや哥

なすくし侍れはとこそこゝにしたるへき

左はいかにかり御へし

二十一番　左持　松雪深

　　　　　　　　　　　　式部卿親王

ふれはの松もはかれるわかはゆきつもれは雪あれ松か枝

右　　　　　　左大将義政

ふれはあしてよるの雪にや花ふれは松の風

さゝ下るはさゝらけなくゆかやしまゆ御はと

おもしろくて右ひてこえさへおもひはべる

詞まにふかれともたゆ百首哥合に卿雪は

をとこえなとあるも御かまに此風淋しと

あやくいれいゝまへや松はおかなかしと云人

判者ことに難なく此方の雪の下り

いつもなさけしらしもみえし作しはわらや

二十二番

左勝　　　前大僧正慈意

松かえにつもりしゆきのおもさにてつくへしもの今朝の白雪

右　　　権大納言教道

真一つ治ひとつまみえて何者ぬ松をさるゝつゝ白雪

左　歳寒て貞松もぬるよ雪をおもひてはあれと

めつらし下る雪よそにゆのしき作る木下る

影の色とらぬこも里作る雨かき不

是なるやしき覚作るもいふ左為勝

廿三番

左持　　　関白

吹しける嵐やさそふ山松の風寒くよその雪のふるらむ

右　　　前大納言資任

今朝積る雪にわけしなる松の枝もみてしをれ

左右歌嵐もさそりさし作る縁意不思儀

山松も積もりしもやまのしきやむ言も難

なくはみえしけれて勝へこさ雨なりも作らると

わとしもへこさまや

二十四番

左持　　　権大納言公継

それも松ゆきしものおきこみかえ山風まかねる雪のふるらむ

右　　　兵部卿為富

いそひね松のおとしも今そとや吹ける嵐に吹あらそはん

左右又等同ありて無勝劣

廿五番

左　　　雅康朝臣

あまの[illegible]の[illegible]て嵐にさそはれ松枝

右勝　　権大納言勝光

降つゝて嵐にはさしも声[illegible]のをとしも雪の松を[illegible]

右哥松のおとしも雪ふかく風情

たかく[illegible]成侍らむ[illegible]

さもさこそはさのまねしもやさらむ

ゆふまくれ立まゆまゝにいそくまに嶺の

雪にかゝりしたくひ松のかち

廿六番

左勝　　　右大臣

ゆきをれの枝もつもれるはつかしの松の

右　　　権大納言忠雅

白雪

今朝はゆきの松をかけまて雪[illegible]白波

右哥猶らく降る雪はしはらく[illegible]

いくらくして右哥は庭のましき花の

雪の松の[illegible]とのましておく[illegible]

さしこそ[illegible]雪[illegible]とわ[illegible]

前ハ末の松山のなミこさしと思て

右ハ浪こさり侍し

廿七番

左勝　大宰権帥資雅

けふひくや子日のひく松ハ宮とらて千代の松かえ

右　前関白

うつりゆく君か代ハ松のときハにいはふ

左新續の千代の宮居をいのる

とりしこそ福の由来の常にかねて

いはふ松にもひく松にも御よとし

こまつハ千年の御なり

廿八番

左勝　入道前関白

君か代ハ松の千代のこしへ

右　前大僧正義運

ひきかへし松の千とせのまつに

左歌池のはかりの松も

さて三ふつの庭の

さらに右歌松をそへ

かゝる文字儀殊に宜く

ぬかしも右歌も宜しく御よたかゐ

廿九番

又　　　左　隆信朝臣

うけぬとも松の葉におもるまに降雪は（未）あらせましけて

右勝　　　准后

しら露のつゆもやとりし月のよはらはぬ高砂の松

左松の葉はみたれもせはせてとはつもる糸

たとへてはあはとみえし御はしてはあし

ものにはして右高砂の松はまたしら露の雪は

まはにはしむかしるむさへかくうちいへし

右の勝はさもありし

三十番

左持　　　女房

わかならの尾上の雪の一村やむもれし松の梢なるらん

右　　御所御室

まつなみのたちかへるしるへの松にしはしもこゝろにあかす

左白雪一村右蒼海千尋波共其心勝劣

不分明

卅一番　恋久悉

左勝　　　右大臣

なへて世のあはれはいまや又いくとせの年の暮を打わかれ

右　　　前大納言資任

秋の夜の月にさやかに見へ月日のしら波のすみまさりける

右下句いひなはせてしかれぬやしいかなる　勝

なくし先年の御内のもとなつかしく人
これをおもひくらふるに猶衆にゆるされ可為勝

廿二番

左　　　雅康朝臣

いくよへぬ山川の水に立枝の上は雛の数のこして

右勝　　　准后

いかなりし秋をかさねてかはらぬにとしも経ぬらん

左は雛のといへる事も聞え侍るを露の上は
つもるべきにや侍らむ萩の
下葉の色をかけたるは猶勝
るべしと申侍るなり

これ萩の下葉いへるにも松も住よしと
見ゆる證歌にて侍れどおもひ出る事
巻に秋の中宮くさしよせしも侍りしと
心よそにつかはしてやいひ合の
事もいかにぞや侍らむ左は
不當のこともある右の為

廿三番

左持　　　太宰権帥實雅

志かのうらやいそふく風の音のこさ年の
右　　　権大納言親通

いく川まてこそ思のむかし見えし年のなきれん

思ひのまへの忍ぶのおもハれ共にまさるらし
哥の様も同しほとにや

廿四番

左持　　　　　　　式部卿親王

いくへの秋の月も秋の露とこそ物思ふ袖にはしのひこそねん

右　　　　　　　　沙弥浄空

年月を思ひのおくもまちけれ心しるらむかたにこそあはれ
左右をわきさの露に袖の涙もまたしのひのそれ
やしもやくらむ同ともしつくる右との
ならくのあかけれしらぬさもしくと
うきおもひのわかれもくるしくさ

これ左ハ艶なるにしたかひ右ハ詞よろしき事と思へるにや勝劣わきかたし

廿五番

左　　　　　　　　関白

うらみの涙の海の浪のひさしき袖もあまりに

右勝　　　　　　　右兵衛督為冨

うき月日ふかきかひはかるゝ袖の外はみしぬ涙
さも有いつか涙しもあけれかたし下るみゆる
わかれの恋のむすふそうしかもおくれ右さうて
しかのをしも歌の風詞もかしも影のむ
ぬしあるうちかはいまて可勝也

廿六番

左勝　　女房

あらされぬ川より魚ひもらへ埋め世には川までとなき

右　　前大僧正義運

今日までも色とらじ思ひてもなほ

左川よりもおりひもらへ川埋む世をは川まてとは右も難なくやはと

猶左為勝

廿七番

左　　左衛門督雅親

むもて埋むしは源なれ人あもかりひるなし

右勝　　右近大将義政

年をへてこそ年月をへて思ふをこゑ絶ゆ

さきかりひるるいかくひとはしかこさむ

をかくせてぬりもとにはよはくこさる

右哥あつ事いとこそ志てもはしと仰られ

年事を渇りこそうぎの事すや思へのかれ

毎にもる哥ふむたしこそ嫁数ある姿あるもの

仰の有しこそ為勝

廿八番

左　　権大納言公綱

[illegible]年を[illegible]ひかりはての世の浮名[illegible]

右勝　　権少僧都忠雅

おりへてもいくよ関のとこひるくいくよ川にもまろ浪かし

左下句すこし直し右菊の花も殊宜梅かれ

ましくにいつるいとそとかりけりや難なく宜やや

可為勝

卅九番

左勝　　前大僧正道意

しらせはや今はむかしの月日をもつもりてぬる下の思ひを

右　　権大納言勝光

ふけぬへきこよひの月をいくたひか年月をおもひさためて

わかなけきのよしとそへてふしても

人音もなくさむのかくなくて

うみはしくえみつのくまつくえ但作者みちのくまかりて

わかひのにつけくるかせさくれ

むかうくすつうなるうし左のたよりのしる

ましくうきつりあふや

卌番

左　　入道前内大臣

年ふれは我のことかたうらまてわかことはなかりける

右勝　　前内大臣

年をへておもひもしらし世中はたてのよそなるにかくもはれ

左やこしもとかの我にかの事はしけれとも

うきつまにへきにまつのかしこまりてといひ

いさゝかもかはらさりけり　太平をとつむしのよ
かゝねはおくりかたまさに為勝

卅一番　祝言

左勝　　女房

其千しよ我世よそのひけ若菜やはるさ海の道の民は

右　　右兵衛督為富

今やしる神代もかはる日の光見るまてたえぬためしなくに

左非凡俗之体也右為勝

卅二番

左持　　前大僧正満意

大内や千代(?)すゝしくにほのての法の恵もえしは君か万代

右　　沙弥浄空

君かためあまたある事のはしめにや君か世にも千代をかさねて

左二句永遠之詞にこそ万代の数とも　左持

葉をいつの代もあるへきものとも太平

君の世々よりも千世をかさねて君をまもりひかりて

まつりゆるまてひさしとて君かいはふなかく

勝劣をわきまへかたし

卅三番

左持　　式部卿王

わか宿やかねてしられぬ人の国までもひろく我世して君まもるらし

右　　権大納言勝光

君いのちぞ長きあふみのさゝれ石や苔むすまでの千代のはじめは

左右の歌いづれもよろしく可為持

第十四番

左　　　　右大臣

亀の尾よやまとみの尾も緑にて君が千代のあかしなりけり

右勝　　　右近大将義政

神代より竹のみどりのいくとせか君が千代をやちぎりおきけん

左歌尚書法範名誉絡書事頗有治世之

隠松竹祝言右歌之稲永宗雅明長

雙遊宴家之也右勝

第十五番

左持　　　　関白

代々をさめおきしせて君と臣道のたゝしき契ことはりぞ

右　　　　准后

あきらけき大和嶋根の秋津のむかしもしらず宮居の秋

互同科可無御判

第十六番

左勝　　　　大宰権帥實雅

御代を行末も久しきみにもちてかけまくも神

右　　　　前大納言資任

君が代は千とせの秋のをきそふる山の松にかゝる白雲

右歌君が代はあまたのいはひるも海の

何この数をよみてぞ何くるしともいつか春を
まちわかれはつらむかしもなく由　左
可何を何事も得たるよし聞ゆる人

四十七番

左勝　　入道前内大臣

鶴亀も数ならずなりわかよはひ君が代をなへて祈る人

右　　権大納言親通

天地の長くひさしきこのかたは君が御代の為にぞ
数ならずなりけり鶴亀もなかの嬉

きみがよるくまていつか春をまちわかれ
右や天長地久詠ましとぞかひ侍りぬ

左の勝右はすこし

四十八番

左　　左衛門督雅親

あつさ弓もとの心もいくかへりかはらぬ君が代々にまよはむ

右勝　　権少僧都忠雅

我君のよはひといつも祈れ春風しやまぬ波の末ひさし松の葉

右君のよはひは川の流れのかぎりなし
御よはひくさぐさをありさまや
ものはとほしく祈るなり右まさる

四十九番

左　　権大納言公總

岩かねて見るみなみのかよふ松も松の数多代も数の宿

右勝　前内大臣

色かへて見るも見えしも千代のうちにそのまへの千代

さかゆる石の岩ほとなりけるかも

こさのうらなみの圓雲高砂侍るも

勝へしさありや

五十番

左　雅康朝臣

見まくほしひく人の千代の限さらしぬ松数

右勝　前大僧正義運

月日さへ千代てや照らす見る千世萬代をかさねても

左歌めりしおほしも侍れと右

月日さへ千代てや照らすといひふりて

絵の為まてよろしく侍り可為勝

歌合

一番　海辺七夕

左　　女房

むかしきく海もこえけむうき草かうてにつゐに星合のそら

右　　前左大臣

かきこされつゐさうにけふ七夕のたえしもしら合のあまのかはかせ

左右月七日なかの世の中のこしくして星合のそらを

なかれ水蔭草のしれ葉にも露とをきてはらゝ

にかれて日かけりくれむわれさる海のあまの人も世にまてさ

へ海のしひたりもいかにとまくる舟のかちの葉に思ひを

てらしかう草にかゝさあへつしかる福寺もさうれしとかゝるらう

むかしみえし　右あまの橋立は神代のむかしの
神と神のあまくだり給ひし天の浮橋と申す
一説ありまた二字は川のわたりの通路に便あり
とて橋つくりし鵲の橋なと二の字によりてもさやうにて
橋とせるにや又橋は別にありてつかさとしけれど
やはり其人を定難けれ詞のゆゑはさらに
まもくもあらて難あるへしとておほしき又
鵲のわたせる橋なと申すことしきさも侍る鷺と
も源氏ものかたりにかくしこさときつゝと申すにや
ことましりて家隆卿のうたにもかさゝきのまや
かつらこゆる雲の上井にさかさ暮のかけりと

よしゆかしにけり

二番

左　式部卿邦高親王

波こえし根はあらはれぬぬれぬ契の末の松山

右　安禅寺宮

早舟のよわまよむかふ(?)あまのまこ(?)もかはれて橋ありあし

波こえし根はあらはれぬ
のちにありしを松山の波まにけて(?)…
ことも同じくとかくは雨風あまのさかやさむなきと
あそことて…とも同しく申しと同しくと申されは
かくて申しははかなしとやおもしく申しかは

てねこそ風よりもしろくうりはやこしのまくらのみかきまされ
歌むすびけるさま似たしる尤かくこそまさるとはへらす
音のむすびてうらく音の作者も似たるなれる
むすび思ふらん一かたにも似たる左にても勝るはさま侍る

三番

左　入道親王道永

すゝむこと手向いはきれ星合やあまのかはらに秋の夜の人

右　竜瀧法親王

人まつと袖をしほりて織ひめのこやあまの川むかひの瀬
むすびけるを尤れ星合や作者のむすはまいらせ
判者このはなさきさこころよらまれ作者もと詞のよ

作りいうさてやあし似たり又手向けは袖とこそ見ゆ
作者いうくらちらん作者も冊まよりていは袖とよりもと
かたはやかはまさうこうかかれば負なり

四番

左　前左大臣家

むかしたあまうとやこよひ人のうしさかれむすばれむとかゝかに

右　入道前左大臣母

七夕そらはちまちて松山よろしくて梅波のかはさ世なるらん
人あつらにあまの風むとかはむすひとしもみし作者も
むかしさかあ人と作者も人へなかでもとむしかれこと
あつらひおは世くやあし作者又むかしぬれ衣は

かしこくつゝくゆく松山の波もすさまつの歌
は打出ゆきしと聞きましてかゝる波の立
様ありてこそ右方の歌はむねは勝しゆり右
まさるとやゆるん

五番

左　　　　入道前右近大将藤原道綱母

ちりぬへくひさしてやまたみつるあまの川しりん

右　　　　内大臣

君が代やまたはつねは千とせのあの松代の昔おもひつゝし

左ありのまゝにいひてぞしらくも思ひわかる和の
ゆくゝゝやや右千代のむしろそ天照大神の
すさめぬとのみてあまた八十の河原とかゝてある
をひねしこゝろなれゆきまて君が代もいせれ歌まさると
ほりさぬとゆるをにゆまたいふもさりてゆるし
その国作君が代の賀にて大神のあめなるやうなる
天神あらはれやまとのつかとおもておもふこゝろ
うかてひを由ありとかてまうつ河にてかきて
ゆたいさきれたるそのこともいまはこんなゆるは左
ゆゝかろくにつきてたつてく勝とすへきや

六番

左　　　　権大納言藤原忠春

ほのかへひのかよいゆれかゝことなりゆるにまかせ天の橋立

右　　　　　権大納言藤原教秀

舟よせて渡るあまはなかるらむ今やいつかとあまの川舟

あまの川舟てわたるにもぬれはまさると

左哥の下句めつらしく聞えしかと右の哥の文字あまりて

つゝけもあかりぬるしく侍り又天の川わたさんまちえて文字

あまり葉平相也しも七夕つめまつやとかへしと同じ心

ままにふれてことを分り七夕の心わくるにて文字なとし

いさゝかよろしきをなすかのあまのかはやすかりける仍以

左をもて勝とせし

七番

左　　　　　按察使藤原親長

今日といへは名におふあまの星逢や又あふことにあまもなもかし

右　　　　　従二位藤原高清

思ひあへぬ今宵七夕に風かよふ身のうけをとなるらむ

左一二句よろしくきこえ侍り右のうけくちをかしくなむ

侍れとも猶其いさゝかおとりてや猶左は大様にや持となし勝負

以ちとしかし

八番

左　　　　　勾當内侍

世の中にもみちのよゝもちりぬれは年まつこゑのなかの風のなかにとや

右　　　　　参議左大弁藤原量光

名にしおふ宮のまつりにあふ今のならひまさしき秋の錦風

左のうたはまされる中のこゝろもさためもあまたあそひもし
さ秋のこゝろつかせは侍るも傍なることとも侍ると
一二句のつゝけ思ひさためて歸の勝にもさためかたく
めこゝろやすく侍らむ

九番

右　　　参議左近中将藤原季經

浦風や波のよるもけふかくしほみちて日の合のまなり

左　　　左近中将藤原為廣朝臣

袖のうへやこよひはさましき秋風あつせし浦の秋のこゝろを

波のをとをきくかこそまたとはなにの秋にひ

一首の体もあはれにやすらかに侍りせりのあはせれ

浦みしきはさる心ちして侍るもとりこゝろかゝれはさるは波

又は侍りのこゝろもれしこのあはせの歌よまらは波

ゆうかくとはいはれとも心かよへつゝ中務卿家高製に

のうたともあはれ菊子のよ文も侍り作あはれにてよ

人ありせ侍りもして右合にとてもひさしつくり

不幸ともしやみえるなかにもあはれ侍りかり

月影あかぬ袖のまへもいかにやゝすこし侍る右勝

なかくにつゝきて勝へさしつへし

十番

右　　　藏人頭左近中将藤原實隆朝臣

柏木にわれもあらぬ波ぞさいはぬ草の露のさかりて

右　　右近中将藤原實具朝臣

まねくやとをはなかすゑのゆふかせにしつ波の末の人も

あたりかゝる草葉の末まて枯ても猶みえはこそしけれ

ゆくへさかゝる哀さも人もゆきかひにやみてにかよ

ゆるとそこれは洞事もひさしくこそなみ二つの名もなけ

なもさくしく年をあらはやさしつしくおもひて

ておとしそへし

十一番　折草花

左　　邦高親王

秋風のさそふもみえぬ袖さしておる袖に家もみてかへれ花のいろと萩

右　　入道前左大臣女

おしなへて秋をしらするも萩か枝の露にみたるゝ人花の文字

右も萩かうへ萩の家源氏物語のかりの詞なれ

ゆるとも詞の雅さはいつまてやかのしめかの家にたれ

なん大方にかなひ侍るにや左こそ勝に難なく

十二番

左　　女房

つゆ草花もさそふゆふかせにしつかに露そとりつゝひめる

右　　尭胤法親王

秋をしる風のまにまにしもあらねと露や袖にもをかれおもふ

月草の花のかさねのみをもしれかれさらに人しれもせす

かゝる猶ゆかしきへとおもひは恋のこゝろにかなひそへくなんし

めづらしくあふみは右もさしてなるべき難なくみえ侍れば
かちとやなすべからむ左もさしたる月草の文字
わすれぬにして侍るにや

十三番　左　前左大臣家

いつまでかそよぐをぎはら花すゝきまねく人のなきまさるらむ

十三　右　前左大臣

まてしばし萩のおかの一もとにまねきし君をのこる秋かな

ちくさの花の錦おりまどふむ波まがひおもはせ侍り
右の風なるゝ萩の露ちるかとみゆる心あはれなる事にもあ
るさまは侍らぬに花なりめなく

あやしむかりてかへしけれ持とすべくや

十四番　左　入道親王道永

まねくしあき霜の色やけしやうつろふ梅のかの花

右　安禅ちと子

あきやうもつゆしらぬむしのねもみしぬ花ちくさは
左のあさがほ光源氏のうへの哥名にしあらむも
かはりてしも思ひぬるはかくしこそ秋風の
文をあらはしてかはらすいひはやまことを
かなたむしをいたりしもこゝろよせてひ
あきはかはるまでのけぢめもなく入れてかなしくもと

つらねて／＼ことにあはれなるさまにみえてもつきつきしく

をかしうみゆるにあらまほしくもなり侍れ／＼こそ人にあ

さ侍るや綺語のためにも代々のことはにも侍るへき

の事は海をへたてたるにかなひ侍るへし

十五番

左　　　季経

まさきおりてこそうつろはされ／＼しむるさむしきあらし

右　　　量光

あさとあけの風にさそはぬ秋そなきおもふやみにまよ

ひつよかなはぬはなのむかしにて女郎花もつゆにゆふ

一御たまさかにあはれとそかなしきふくかせにて侍り

十六番

左　　　親長

みかさしあはれにあかしそめてかなしき／＼しの

をしかなくはなれにかはるみえて行る秋の萩の花

右　　　円大臣

そのつゆもかれ風も神さびていはむかきにける／＼しかる

あはれなるしもをみてかそむ秋かけ古今のことはと

かな／＼たいもたいは侍はしまくれてもとまるれたゆ

かくえ霧のあらかくてとほくゆふこころのことなり

こそて侍りしれもをむ上の詞はありまさりや

みたされ／＼かなしのけいまれいむかしにけりけり

まくらにやすらふほどのみゆかしもなによりてかいたづらに
ちらさむ花よりもゆかしかるらむ

十七番

左　　　　　　　入道前右大将家女

袖にのみうつる萩の花のえにそめし家もちらさし

右　　　　　　　教長卿

あらぬ人の露のまにもしらぬかなあさ萩
左のうへにおりたる花のうへのえにしるらむ家
まちいでしもいかにとぞ見ゆるものにて見えし
露にしめしまし萩の露もあらくもなし人
ゆかしき露のかぎりにおりしとしたらに

ありつるかなしらし又萩の露玉にぬきとめて
をみなへしものといふやうにもおきて露のみたれ
ゆかしみ

十八番

左　　　　　　　實清朝臣

白露の袖にしもおけるもみぢの花もさそふらむ

右　　　　　　　爲廣朝臣

わがなみだに消えんとおもふこれあらばしも萩のうへの露
花もてこそといふにてもわきて袖といふらん行きとを
しるなみの袖のうへにあらはれてうき小花とみゆる
さしもしらで又小花がうゑし萩の花にもゆかしかりや

右こゝろしらしとはらむにもあれ萩の露かゝりて
えんなるさまにはなくてもなにもゆかしくあさく侍るにや
よむもさしかゝるをゆかしくおもひてもとまさり

十九番

左　李春

百草の花のはしきにゝほふれはかみかきまてもうつろふらし

右　高清

手折られてこぬれやあやしとこれへし花のあるもさそひなん

左はさりける神なきまもよしとて大貳三位のあさなと
さもと神かきまてはかへるとも梅のくもまにおもはしひ
おもはらぬ持をとるへし又松の見ゆへきと

くもあらてむらさきゆかしときこえしほとにわすれぬにこそ一首
まさりていふへからしとゆかしけむそもてこそさく
ゆかしくおもふにや右女郎花あやうくもあさえきや
立らんとゆかしとてまさなきやあさしたれぬるをゆる
の花のむらさきまさりけるにやひかけせぬやうにゆかし
といふめるにてゆかしてあさきにやゆかしん

廿番

左　白當門侍

あさりてきえあさをはと秋のゝの花のあれしき色やうつらん

右　實興朝臣

さふとわかれゆくすゑのあさとかなき宇にならんまかきの鶴ゆかふかの花

秋の野の花の色々さかりなれともいつれかまさるとも
まちくらへてやみ給へと侍りしかとも判しかたくは
とかくしていひかたきにや、むらさきの花の色々さか
哥といへるも、むつかしきにや文章并花もあさう
今の世の歌ふりを申をとも七夕の題判りしらへ又ひこ
みとのつくりたる傍題とやおもはるゝやと申侍し

廿一番　晴夜月

左　　　入道親王道永

清見かたなみちに光をそへてうかふあかしの浦の上の月

右　　　實真朝臣

めくりあふ雲のいつくも夜をあかし秋として月のさやけき

左哥は、なんとかやいひつくして、秋水共長天一色
たかにいへるを、むねとひとつ判りなむ、右哥は、の句かく
めくりめくり判り秋とて月の又ともしきかな今夜かは
ていへる事ことこと秋のよもすからひとつの判りた
勝に判る

廿二番

左　　　前左大臣室

あまのはらひかりさしそふ雲のうへの秋の月はまさらむ

右　　　内大臣

秋せよと雲井の月のかさもりえたくしけくも
わかしけきむすひすくく雲の上はいつる影

明法てらさぬかつらのさとゝもしやまたくもれる秋の
月もさやかにさしいでゝゆくらむめりけたるさ所
なるへし　右は雲井の月もおなし　様に紛れもと下
るなとはたおもきはらや紛れん
女三番
左　女房
こゝろなき雲ものこらぬ久かたの空のかきりや月はすむらん
右　高清
代をてらす光もともにつきもせぬ秋の最中の月
左ひとへに雲ものこらぬ空のかきりは清光何
変をもかくしける物のむかしにおもひかはしゆける右代を
てらす光かはりなも猶最か頃へさすかあらぬや
女四番
左　邦高親王
秋よいかにくまなき影をもおもひねらんかゝるそらに月はすめるも
右　前左大臣
てらしもせぬくもらぬなりも秋の月さやけさかはかはちてかはるとさ
秋よいかにくまなきさかけ見てもおもひねらんとありてこそ
来れる月はまたくもしもとはありねへくもおほえね
ひかりはかはらねと　右てりもせぬくもりもせて
朧月夜とやらきらけなとおもへるさまれてしもの
うるさし物か波有しきなるへきにやさてもあへさも

春を好むひとはおほろ月をも程しくものあはれと
やへやゆかしとされも八月九月の空の光ひかりに
對して月むかふ人へしかはかくおほしゆるし

女五番

左　　親長卿

なけは今むかしのまたあかりける月もきえてやかるさ月よあそはぬ

右　　量光卿

おほろ夜い雲はかゝるかたち里ともむかしの月やみるらむ

左むのくもりかとん曲ともおもふかくゆかしあり
かくもたちぬやいつもやらさ月よめてくもむりを
たくひなきおほしゆるし右一天雲るゝて見里月

あさからん風のおむすふおのれのみさ西にて出てめてみえくもりかれ
おもしゆるし

女六番

左　　為當朝臣

秋風のあかつきの雲をさそふなりむかし西の月を見んかな

右　　為廣朝臣

みるまにもむら雨もるかすみの月やこよひ世にかはるらん
むかしもこしものみをはしさしおもしかくれ月の光
にゆるしこうしられいかにもまさしく左は行くうれ

女七番

春はかけてさりこりゆかり

左　　　　　　　　　　　　實澄朝臣

さらぬたに雲に秋の月中のかけはすみえて雨とみえけり

右　　　　　　　　　　　　教秀

月の中にかつらもこもるひかりそのかけさへ雲にゝるものとみえ

杜子美か詩に斫却月中桂清光應更多とつくれは

左歌はさらに月の光も雨にまさるといへるむねにはよるへし

く雨とみえてといへるこそまことのあはれもふかくきこゆれ

勝ちやあるへきさまに紅葉とよみ侍りけるや

月の光にもをかしきひかりを花ともちるをいはむとやあらむ

し月のかけのあはれさとりてさ雨のくもりに風情を

ゆく所ある持にあらさるへしとをしはかり侍る

久かたの中なるへきを今夜しもみるそのまされは

すゝろにもよりまさるといへる左のかつらを

かりえてこそ家の風もふきつたへくしかはよろしく持にや

廿八番

左　　　　　　　　　　　　季春

うき雲はあらしにはるゝ月かけのさやけきもさそひのこして秋風そふく

右　　　　　　　　　　　　安禅寺宮

こよひなをくもらぬ月にあかつきて千里をかけてみわたせはひかりもおなし

ゆくひのこして秋風のかけみちさそふらんとおもひ

左右ともに勝るに難ありさらにや持にとよへし

廿九番

左　入道前左大将公数女

秋風のふけゆくまゝにしまへ月ふくるしものこゝろそ

右　入道前左大臣女

かけゑみし人の雲めくもやたえぬさ山さしてくる月の光も

さやけくもあらは秋風よそくやゆくらん　右かけと

光とは雲かくも霜よりゆゑけふ山のかけなるらむし

御は已うされ月判者のあなあるくをりてまさるへし

ともはしめくらし持とすへし

秋十番

左　季経

かねてよりひるの床もしくかのよつもる霜みる秋の月かけ

右　覚澄法親王

雲風もおさまる秋のよのつゆをみかくも月のかけなりけり

椿家の雲家持ずまさるはくのひかりもつまさるへし

持し小松かけはあらし雲をかへと御かあけなり

やよおかしし御をとしかけくりの山のよみ求ある

もつよりてまゝし御り右をそくも月のかけなりけり

かるしとそくゆく御とうしみとさやしまさるし御り

秋十一番　致家名恋

左　前左大臣

あやしとや松もるらことゝ人のあともなきさぬけるつ袖とまてを

右　　　　為広朝臣

つれもなき人に作まて煙立かくれぬむろのやしま哉

左方申云むろのやしまのけふりすくなくや侍らん右方申

かさりのむろのやしまにはこれは哉と申されたる

ゆへりけれくつまうこま実もなけれとも申しとそ

たまさかにもおけれとなむかりたるうまするはれ立無の

むなる人々し無名とは一かしまへとこそつらきもる

こゝろをやへまこしうむとかよはし侍るとと雇名といひ

つけられけむとの御へとうにしまう申しゝ所も侍らむとも

む中有見悟し侍しは猶おほくも左右は安

And し侍らは定めへは解案とりて申侍るとて

ゆかりにも信用し申まて御へとはおほさるへし

卅二番

左　　　　入道親王道永

なさけなき浦のはかなくゆかぬすきて心に立すらるまし

右　　　　教季

ちきるゆへにはみきのさいつらりいうさきえまさへもあるせ哉

左おもしろくるかへのうつりなきすて知かとしも道侍く

おろしく難なくさまや右ちよるて御てしなきのうち

かといへやいつりのあるせとしもらむしはさいこれを

卅三番

無名の ［illegible］

左　　　邦高親王

せめて見し月の道にかへりくもゐにうきにはいかりけらまし

右　　　内大臣

あはれとてうけくらしつとみつくさも契し人にまたなりせは

左右ともにまさりておもしろけれは意のまかり無名にて
ろしふ明なるぬるや

三十四番

左　　　女房

あはれなぬうけきにやつれ秋さへいてしらぬまにいひやるなれ

右　　　入道前左大臣女

うらみのあはれにあらへてや吹風もしらぬ時の花の袖にかかれぬと

左の歌一首は花の方にもとよりおもはしく桜に御かなしと
下句のかたちを思ひぬさまやゆかしく右によろしくの花の袖に
あかねよろしけて左にはまつかさしておかしの心もいひつる
人のうらみるなしと思ふまてまことのやかなりしに
かさなりしたたりて左勝ともいふへくや

三十五番

左　　　季春

何となくあふせもしらぬみちのくにあはれは海の袖ぬらしけれ

右　　　前左大臣

いつもせし恋しきにものいふことにあふけはつらいひやるさよむ

右のうた命一条に有りかへし所をとは虚なしといふへきや

ゆへこそ左みちかくはありとつねなるならひは川なれ
右の歌もよろしくて勝とや申侍らん

三十六番

左　實澄朝臣

あふことをあらましにしてなくさめつつらさは人の数ならぬひと

右　高清

涙にはあらはれわたるへきも涼やかなる中にかくされぬ立まよひ

左歌こと葉も無難のてにをはかくるなるのやうさ
なかなかにも人めさてもねとゆかる作者とおもふへき
右や勝へくこそ侍り

卅七番

左　勾當内侍

あひみてもなほしもおもひかけぬ中にまた名残かな

右　堯胤法親王

一かたにおもひけるものをおもはれての後の物になたななりせは

左のおもひぬ中右は後のほとにもは勝名
よしのかたはかなかるへきにや

三十八番

左　季經

いつもなをくるまのものにしひしらぬさへ秋のほとひと

右　實興卿

あふまてもおもふ世までせめてなけかぬにともおもひもかけぬまに

わかこひのむなしきなをもしらはこそ座なとこひかたさ
こちや右あはれとあるをせめてはこれも名立こひ
のこころなるへし持とそ

三十九番

左　　親長卿

おもひわひぬるこしれいかにならむともなはいてせめてもやのかの

右　　安禅寺宮

うき名の立もせめて一夜あはれまてあはれかなるにかはらまし
あはれはいとせの山のくものむら判者題のこころを
えしるまし勝とそ

四十番

左　　入道前左大将公敦卿

いかなるやせにこそかこひのゆゑをたつかとをかしきかなかにも歟

右　　量光卿

ぬれしの袖よあるに思ひのたえぬよむかしさえなからへまし
右もなかしこき名とは何となとしるのおもよるを恐ひ
とありてたこれも無名むあしかなさるにいかにや左
歌のさるよりこそ何なとしるく勝るやらん

四十一番　不逢恋

左　　親長卿

あさまみちへのこころの花よるやかはくさひしきをせめても

右　　實興卿

今さらにうゑてもいかゞねこき虫のむしもたすさあらき紫苑
也ねこぎむしは萩の花はいかに咲ゆくへ
さやらん、つまこそ楽しけ秋をせむともしらる
かくとゆかてはかくりゆくへさりや小町か哥に
色みえてうつろふものは人の心の花とゆきけむせ
ともしらつゆにむしなとかこゑくちるもゆくへさやらむ
右のうたさしたきことなくらむへさも左の方
まさるとさいひ侍りけれはとかくへさや

四十二番

左　季春

きゝれ秋よこそむしねもなきむしの聲にあかぬ我身え

右　為廣朝臣

虫のむしても風をぬる中やなくさとって契哉もし
たゞ右ともまてこそれ羅も行くしらぬともしれく虫の
むしのありむしもかくれの虫のつまかきにしらやゆん

四十三番

左　白當円侍

なつかしの衣へぬるむしとやむし年風をぬ我もつへ

右　安禪寺宮

織のはたのつかりの中くにねと虫のむしつゝてもみにいまつくれり
たゞなつかしとむかひかるにしも人の衣それ草ふて招きか
まかしく思はあるれはそこさこそ侍る右ぬれ

むかしみてもるはいつまてかあまりよそのさはけなき
ゆやゆしこれも左まさるへくや

四十四番

左　寶治百首

あかしもあのそしもれかけてよるはれみしへの袂

右　道深法親王

これはちとくいまりやあめはれしあれはさてねしと月末の空
源氏の宇治のまきはうきふねのねやにふまえられし
てゆく雲もされありて後の月のありしを見て
見えはにみしまてみまいは又月末もさえれさつし
かけるてとうち給へ左の哥は冊なとよまれ給ふや

志つしも野無常のふるやかうしゆへ右冊く
まきしあれのそらさるへくあのはへさこしとわひかお
さし志らぬはれ未まておりひあつひくらやくるさ
かくしや侍らん

四十五番

左　女房

さくらめるきせにいまとしれしもの終もおりへはあこふ中まあれし

右　内大臣

年月をおりひろひて雨のあやなしとひこしむ疑も
さらにえしくれさせ給ししへ思しくれてしも世
なほむらいてあへるかしれらつ紅しそもやあしむさ給

霞のをかへてさこむかしや右方のつらもとひらかしと
きのむかしのこりし月を思ひくらゆへさしこしを
おほの松遂ける仰せまへの霞は右とこそむかし
こゝやさ勝よ仰らへ

四十六番

左　入道前右大将公路女

男女のまこと霞のまぬかうや偶のおもくもさへを恨さへん

右　前右大臣

むこともしちそのまゝ霞のましく偶のあらぬ世とちてぬ我身ともれ

左のつゆま霞はまぬそりけるもいつかりあるべき
よしとんでは思ふの左をまゝ仰せの程ぬ候て
右のむもさくこのめへくや仰せし右ハあしかし難か
まさしくるうや仰らん

四十七番

左　前右大臣室

偶のあら世なくくたて一しかくよ霞のうやせまり人のまこと風の葉

右　量光

かくもむそうりこゝよ萬葉の家のかつらはいつく霞のまさむ

左ハ右方霞はねへ下けるみと情よ仰せり右ハ
一るこそましかへし左はまさしや

四十八番

左　季經

見ん程を思ひしるらんもしくも桜花のまへぬれわかと人のいつはり

右　　　　入道前左大臣女

花まてもたのましくて身をもしら雲に侍ひとみるもあらしなりけり

左ならつ桜の色羽ゝり又こそしろ雉も作らん右

派偽しくとはりては花のましものたつかはおほしく侍れ

と下の句ことにまけあらぬ桜は侍りしかとも

しともおりひもつけぬきてみわら出て作情あり

桜かり作りたれはしとへて勝とすへくや

四十九番

左　　　　入道親王道永

さくら花のちるを待ちの花のしら侍もおりひもひかのためにやあるらん

右　　　　高清

契てもみよし花のまゝしぬゆめとはかなれと待人やあらまし

左右の歌ともに花のさしのみえまさりまさりぬへきと

大略おなしかゝれしよや歌合の判の詞にあらも

うけられてと古人も申侍しにて持となし

五十番

左　　　　邦高親王

いつはりのふることの秋風にまかせしくともいての花のまゝ

右　　　　數秀

契しもうつろひかはし後の人のこころの花のかけもあり

左歌まことしくしくもいて花のましも素性か歌

おなしくはむ詞かしかならすあるへき右を題の
むねをはたちぬれはや左勝に侍へし

五十一番 山家雨

左　秀能

人もこぬ軒のかけひの水のをとにそへてまさる雨の音かな

右　内大臣

柴の戸は雲のとさしてかくさ山は雨さひしみしぬ暮のさひしさ

かけひの水のをとしつまりて柴の戸の雲のこゑ
山さとのひなさはつまもしけらかくさ右は侍らむと
雨さえしみしぬの詞雨をえんにくきひてもおはしなるさ
こともや立くるたの雨の音を加へむすことや侍らん

五十二番

左　白當門侍

なかめやるほかひの山も雲もなくしてひきさ雨のふられ

右　高清

こえきひぬかり家さえ秋風もかけや山のくれしく雨

高山の雲のよこ庵の戸をとこし相東の門のかせの声
中秋のさやうなつくしもゐいけともとしいつまと
あしくも中かくさしや侍らむ

五十三番

左　季春

まさやらぬむれ水まぼの井かんやとそつつ雨の中かる

右　　量光

らをしらしいてまつ雨の秋の雨のよはの山かけの庵

夕まつは山かけのいほつまこひおはせもやゆらん

のれ水のおとこゆりたすまふらはむしてもやゆらんいはらう

まさにはあすまや

五十四番

左　　入道前太政大臣女

世の中にへくとしてね山里ね雨のつまにさよいの雨さへ

右　　安禅寺宮

山かけやくもゆく雨さひしさもしらまし風のさかれ

左右ともに難なく勝負わかちかたき

しやゆらん

五十五番

左　　実隆朝臣

世中のうき郷のれ山にかへりつゝくる雲もをかてそれぬ雨かゝる

右　　入道前太政大臣女

山本のうき郷にも雲まよふかへりまてゆふはるさへよみえぬ雨かゝる

横山の雨まへ君の郷くからへ雲しるまとろ閑寂

ともにいつましとおりしさこめかくゆれ志し

らくねともそへくや

五十六番

左　　女房

うき世をはなくいさひしにたえぬ雨音に…山かけの庵　唐人

右　　　　　　　　　敎秀

さしおかぬ山のかしもたえていかにきかせぬ雨もかくさひしさ

こゝろなきひとしたに雨の音をもせぬ雨もさひし

さひしとおもへくれならし時ねしとや雨くしさみ

おかれゆくえきれ山の木末からちらしてたえぬらし

まさしろうや

五十七番

左　　　　　　　　前大納言

さひしさもこの世をはなれしやうし葉のつゆに袖ぬるゝ身に雨

右　　　　　　　　實興朝臣

山かせのおとしかけもくれ行る雨にこそまかれし雲の下庵

山ふかみおとしかけもくらしてゆふ雨にひとくいそれぬ

かくれはあらしも雨の…やゆふしく又猿山かな

ゐなかれる…ゆふ…たえの世とゆふへしもこゝろ

葉の色も雨のこゝろ…ものやゆふしく

五十八番

左　　　　　　　　邦高親王

さひしさはいかなる山の…時雨さくらの雨

右　　　　　　　　為廣卿

山ふかみ葉の色かゝる雨に袖ぬるゝ我夜かな

山…ともさ時…里…

の姿念に心ゆくへしさらぬ歌もさうへてやみなし
侍り神妙にこそ歌の我かちにこそとりく侍也

五十九番

左　親長卿

雲はるゝ立まかふ山本に移れる歌にもすてゝも

右　尭胤法親王

あら玉にとせぬ世はなれとして歌路に人の花かなる

左の歌の詞あやしけれとおもしろく侍るにや

右の世中の花は峯の露にあたら歌の侍るにや持

にとへし

六十番

左　入道親王道永

うき世をいとひしもしかれ世の中にまさる神の言の葉や

右　前左大臣

いつしかへもおりしのこる山の

左の歌太子賓客の菊道

花の時の歌しとこれとよりなるをさしての思

おほかたもありけるとも道理にして嵐山の歌の秋

草のいかりのもとのなほしへとに

あゆみもたのもしとほかるをくへさらに後成

乃部三の歌とおもしろけるに歌ちよく侍り歌を

のことかけて侍るほとに

左哥もしられ難くゆゝしけれとも長高にし
さはるところありてかちとす

六十番　砌下有松

左　　　　　　入道前左大将家女

千とせへんちきりをこめてや君かみきりの松の色もかはらし

右　　　　　　實真朝臣

ちよふけむ君のみきりはちきりやまこたかくなれる松そみえける
君かみきりのちとせの色も松のみとりそかはらさりける

六十二番

左　　　　　　親長朝臣

ゆるきなきさゝれいしにもあれしい君かためことなき庭の松

右　　　　　　入道前太政大臣女

あらしさへ君かみきりにちとせへん後の松のふるえし
あさ首のてまたた九へ人のまてしあらしともあはれしこそやと
右ちとせふる松もとしあれはまさりける

六十三番

左　　　　　　季経

ちとせふる君かみきりの松かけにきみやちよよむ松風

右　　　　　　教秀

もゝしきの庭のもろもちとせへん君かひかりの花も十かへり
君かひかりの花の色をもろもろの君かちよもろもろの声に

あさいやしま年ふる声もうらしやゆくすゑ

六十四番

左　入道親王道永

すゝしさを風にまかせて池水に風のけしきは松のまへしさ

右　量光

ふりふるこゑのみきりの松風やたちてちとせのたえぬよりふく

うつしうつす縁のかけのいくちよも二葉なりしを

まちなるやちとせのこゑよりふくさてといは

風のけはみるいろにいしくやすく仍あらし

六十五番

左　邦高親王

めけあめのきみこそ風の雲のかよみにいくとせつ代の君にくへぬる

右　高清

けふもこそ雲井の庭も年ふりてえにこそあれ松風の音

いくとせつ世の君にへぬらんえにしきてあるまゝかせ

のこゑはとしよめけあのえさこえ風声の文かくしぬよ

つくそてちゝく傍方をとめてみこゑや仍ん

六十六番

左　白當内侍

つくへのほとのみもちとせやへぬるこゑのみきりの松の下かけ

右　内大臣

百余風ゆかしき御よ年をへて声も松の木の末あらしにそきく

左て新皇后のせつけありて千世まてはんへしことゝ
なかりし右ハ日円裏ニ春ありさとらて百数の
あちさきを志てへなにとしてへく持とえん

六十七番　左　女房

すゑとをし雲井のはるの年ことに春あらそふつみの

右　為広朝臣

みとりもやかさねてちよをへし春も色もらにあひおひの松

すゑとをし雲井のはるの春のうらの人の御はへさ
しかえとゆうらむありかやしく思ゆるより女房
内大臣御制衣とやしりすせらむゆく春

ことさ文もこそまみえしかりとも当時の法ニハ
さも日やらしゆるしハ老波をおさへくかく
松のひ得くまゆ
いはれたにハ千代にハ春の月まそへて松とも雲井のは
そにハかけらし柳この十八公霜ゆらのさくらとし
かへつきみとして嵐の夜の落葉の唐をおさへけむ
て春のはならさるなからるかむしもとし第ニ本
あくらありてもしさらのうちに本あらしさ文に
かりや雲井のかきませてまふの人の思ふ
ことはかりしくは思ゆるぬすやあらん右の方ハ
老れたさくさみ及らハ左の勝ニして侍らんし

六十八番

左　　季春卿

松か枝も露やおくらむこの葉の玉とつらぬかるのみそきこゆ

右　　堯然法親王

君かへあひみそめけり松よりもあからぬものち代万世にかけやあかれなん

ちよ万代のことはいくあくやすくもあらましくゆきまし

とあまりはまことにみちくゆかりたの結句もみえけり

ことともあるへしさんすや

六十九番

左　　實澄朝臣

雲のうへやたちかさなるあさき松の千代も見えけるまて見えける哉

右　　前右大臣

いくの世の遠き昔をこれまてあかねなる人昔しもへたる松のみとりか

左みえよりまさりて見え侍るを右こけむしていくかの松

そゆかりありしと判しくらくゆかりや

七十番

左　　前左大臣家

万代の君かちとせをさゝれやちとせの中の木の逢の松かな

右　　安禅寺宮

あさ風にかさなる君代にあからめけり君そみそきりの松を数へん

左右ともつとめたちとせとかけ侍れとも松井侍し

とは万代を松井にそ君をいはひちとせの付

まゐらせんとかりたるとてつかはす哥の御返しにとりましけり
またの日もしか御返しす 右も頼もしくて
御返しとなむ哥のことくつかはしける

一巻のおくに書たりし二首の三首のこりけるは
筆のすさびに書給ひし書の様なるものとてかき
つかはしける

あはれしれ 七月七日の 雲のうへ 星あひの秋を
とりしたの むかしやこそ あるへきを かくあはれとは
なにさらには むかしを思ふ けふとてや こと絹らけて
しれ侍る やかくとせよ おりあへん たつらしかたに
いもと行き あはれ中ける 秋てなし 秋の夜中も
中々しき わけはあらね 雨と言ふ 見とめ頼もし
おほえん そのえんもの いさきと あかぬ人かも
るかけし さりとてもに むかしの 月ぬれのるる

いかつしま　秋かぜ吹なむ　さしかまそ　こもゆらの今
ならしぬく　そみはての　やましらき　とゆくらめ
物たまへも　おほをかくさ　むしくも　ゆかれいかれ
りしのなき　かさあかすそ　ゆてもう　われも中にむ
ましもつら　ねわひの影と　うつせしも　なるしもあまも
なかききけは　わ妹かしら葉　しのしくこに　ちくぬもとこそ
うしくるも　きにしうわう　ちをとさはい　ぬへのちくさと
そられゆめ　ゆめもかりさて　かあれしさら　年もくるあか
花さとらへ　ををもれ下にて　あらせけり　かくても中れ
そうく秋　ゆしく川遠れ　ほとかりと　みしむかも
見くゝもゝく　月のかけり　花も干もあ　かくのあはもとも

もれおりよ　袖のかくこい　かさくあり　我身は恋てぬ
るゝつも川　なけさ君もれ　こりしも雨れ　うしくもかれを
こひしらた　ゆれつねわたと　いひかう　もうらしあらぬ
ゆかしもそ　世人くるゆれ　ちしけかは　やいやせは中
いゆしらて　いかせれ山ま　れもくても　ゆさの影に
わくるへぬ　木の葉の時雨　まろみわめ　袖とぬらさぬ
秋をしる　ゆさうらむへ　わかゝりても　もぬてくりと
ゆくれ袖　ちちらもせれ　この葉れ　松かけてう
いそりける　かくかりけの　おほろしそ　みゆけの色れ
都くま　とけ河路れ　ゆろくま　こそみつ今と
おとつれは　ゆしさ七そに　ほくひつて　花古ろしと

あつまへも　ゆきの為にも　もろ人の　あけさむとて

あけぬるを　これをは世々まて（世）　あまさかれ　山路をこえて

きれぬるを　なつさ世まてや　つたへらん　それもむかしさ

ふきれ十　いつしつくの　たもとまて　人のけしやて

あつまへと　みよしのゝ山の　山のはの　葉をいのりて

すゑなかに　ころもをとも　ゆけまくも　ゆくさきを

とりぬれは　これ一巻　まきさをへて　かすむ浦の

よしあしを　むかしまけて　ともしれは　しらぬ市の

ゆらぬけを　しなかのけふ　えてとめり　いたせんとも

おほきしれ　つらくつさ　つらくま　ありひらけて

いはれしれ　いまもゆきん　みちなくて　今のみちある

ふるしれ　かれぬらんと　もろいあつめ　さはれ川ゆく

あらこさの　あとはらせて　ゆくしたふらん

七十六老翁覚恵在判

勅献判詞而已

左

女房　勝四首持三首

式部卿邦高親王　勝三首持二首負二首

入道親王道永　勝三首持三首負一首

前左大臣室　勝六首持一首

入道前左近大将藤原公數女　勝二首持四首負一首

権大納言藤原季春　勝三首持三首負一首

按察使藤原親長　勝一首持五首負一首

勾当内侍　勝一首持五首負一首

参議左近権中将藤原季経　勝三首持四首

蔵人頭右近権中将藤原實淳朝臣　勝一首持五首負一首

右

前左大臣（西園寺實遠公）勝二首 持三首 負一首

（德大寺實淳公）

安禅寺宮 持三首 負四首

尭胤法親王 持六首 負一首

入道前左大臣（轉三条公敦公）持五首 負二首

内大臣（二条尚基）持三首 負四首

權大納言藤原教秀 持二首 負五首

従二位藤原高清 勝二首 持五首

参議右大弁藤原量光 勝一首 持二首 負四首

左近權中将藤原為廣朝臣 勝二首 持一首 負四首

右近權中将藤原實興朝臣 持五首 負二首

歌合

一番　樹陰夏月

左勝　　女房

蝉の露時雨もしはし木の下に夕付月そかゝる

右　　式部卿親王　依之負

鳴やむ声はしはれぬる夏山の木の間にみゆる月そ涼しき

左歌聴蝉聲於瓊樹疑時雨之在枝以見月影於瑤林誤秋冬之入葉間其詞妖艶而其心甚深者也

右之句短霄早鳴蓬望於月之掛林猶風於雖異他餘情難及左者哉

二番

左　准后　まくらもと

吹よはる風のまに〳〵木のまよりもりくる月かけのさやけさ

右勝　尭胤法親王　あらしとの

かけかきぬ木のまのつゆにとく霜のこりてうつる月かけ

左納涼の題なるをさしてなしとしてさしたる儀なしや

まへかきし右はとく霜のもとにうつる月の

霜やと疑ひ侍るかと月照寒林霜を侍るか

海の秋れ映しあかりまてかりくて侍るを本と

葉の色もなきをいひて月の霜の詩なり見ん

侍るとて左を勝とならん　右は

海より侍るしかのゝ月

三番

左　入道親王道永　御室

中天よりやまのはのみえし秋の月は木のまのかけ

右勝　前関白　一条殿

いたりあふ山のみねより出てくるはさ海りもしら月もみえけれ

左はしやまのはのみゆるとのなかに秋とかや

侍る夏の余情もなく侍る文字の木のまなる何

前よりの侍るらし一首のむねにかなひてし

こゝにて侍るにや右は山のかけといへるなり

すくしたるに侍ると山高碧玉なる白しかるに

すまし御かたへもまさされたるにおもしろきにはあらねと
やかれおとこ定家にもしきを御かたよりおもひしるへからす
はかりにも一首内志てそいひ志りて御まさは勝へき
しや

四番

左　前左大臣　徳大寺

あき風の身にしみわたる神はよけてさしはれやこえ夜寒の月

右勝　左大臣

志くれあふ木の葉をちらさき東風やこすゑの月成る

左はけしきもよく御かたは後撰にある志もにしてめかり

あかはかまへてあるとは御まさは慇懃なれかくしも

御かたは新にしてよろしく御かた九神まさりける
こころやすく御かたの右との一首内ゆへあるくみとて
御かたのは猶勝

五番

左持　前左大臣　政　花山院

志くれあふ木のまの月はさやけくて見えもせて四方の木のは風

右　参議右近中将義澄

新やしほ思へ松はつれなくて木のは風まても秋の月

左寄はみしかもあらんはとも見へてしかりけれ

右寄は夕月秋さいや思へのさは為なおもし

為りはつまりも古今集なりはしてくるしかりて

右哥いはれたるにはあらねどもいさゝかも別なきにや。
まおもしろく侍るを猶よくよく見侍るに松は常盤
の色は木の葉にかはりて月の時もおなじこと
なれば夏をしもおもむきなくや持とや
申侍らん

六番

左持　権大納言実澄　三条西

海辺の月も木の間に夏山に秋をわきてさしくもる

右　民部卿為　下冷泉

くもりなき秋とやしるらむ継衣月をとふ木風にすゞしき人

左持の月もおなし月とはいへどものゝ

いとしるくみゆるにて夏山の日晩の声おもひてやや
さりとしも侍らん歌合のよしとて有明の月の色
もいかゞとや右くれはとおもへるにもとし侍る
かなしいつとも申侍るにまつとなりける
こゝもを夜月の影もやすらに又木の葉のくれとい
かすがもしたてまへにやまへ侍るむつ
くもりの秋のそらもかゝるにも木の間の上
まて秋月をおもふ風情ありてけふは侍るさや
きいふらくつね持とやとなむ

七番

左持

右　衛門督為廣　上冷泉

ことさらにかきなしたるにやとおもひしに秋の月

右　　権大納言宣胤　中御門

夏衣かへてしひとへ山月もかけてや松の下露

右歌夏衣とよみて月もかくれはなるこゝ

猶かくて新しくかくて御一首をなりけりとこ

こともなく候に憚なから御其詠のさまは衣香

自らに一首よくかきてあまりに重畳せられたる左歌

猶さしかし判者につきて御はかり源氏物語には歌をのせ

とまりたるも御沙汰ありてこそ御ましますとも例

めつらしき御事をやらんいひて月まてもなしにあるは

をもしろく候はんとそ　千五百番歌合判は大臣自歌

のこりとも御はとて勝にあるへく判者にはあらす

御なかにも勝負を付られたる御事也先賢後

愚の差別をもいたく御心けかしとの苦編まてせ

雌雄を決せられ候や候らん

八番

左勝　　按察使俊量　あやの小路

蝉の羽に衣かへしてむかしにもかへる袖の露や月もうつろふ木の下かせ

右　　右近衛少将季種　四辻

志のはらや雫もしらて夜半の秋の雨もよほす月の夜をそふかき

さえわたる秋やまてぬるゝ人もなき月まて御かくし

左袖の露にうつりて詠ありとも御みしれ右

月影のしらくまなくとも、いへんやとつゞくの思給
もしも徹月かげのかたにみえ候へ共それも殊にあり
めづらしや又夏木立めぐらしてうち流あるとも候
も新拾遺集に常ゆゑの例も侍らぬ哉なきあるに
花をおもれれは夏木立そのれしてゆゑしてここにもさも
ありめでけるも左に勝りてもはいかにもありし
好もしく存ずるにや

九番

左　　　権中納言宣親　中山

夏乃夜の霜とや未山ゐるさきかへり風ふく影の月にうつれし

右勝　　　沙弥常世　二条尾

志けりの秋はいつかの気のかくしも月のかけ　涼す
右方後撰集に秋やとはいかなるてらは楢の葉
ならし侍るにこそとしるにや彼楢木葉よりもいさ
右をもつてもえんかへの前の侍るこそ侍
るにこれにてしも六百番歌合判に定めおはしまし
ても不審なるしかも侍り但文永の度仙洞の歌
合に為家卿なりけれは右方と不難例と侍るに
とくくのかへことこの此のいとして如かには右方
の詞まて侍るに大に難あるまじくや侍らん左方
月を霜あせなりぬる義なり月につまし哉さて
いかにしむてんかくと猶夏の夜の霜とふくと

なひつしに由るかりけて末は哀の作者作をかけ
ぬ君をいつもあかぬことにしるし又册ホの平頭病なそ
作り千五百番の歌合よりえらひくそ判者ぬるをとしれ
なれともあかぬ歌を上下の句もりなとしる時も作は
ともかくてとりさ難すはあらぬ作なるへくして結句勝
作の例もあまた又同歌合あまたのさ難あるへくを
あられとか勝者ともにしるは侍よりし作れ
右を左の歌とわかりへからぬ見難あるさに付てても勝

十番

左　権中納言季種

いやせむ千里晴ゆく月もにしかけ木のもとに秋の空

右勝　参議雅俊

ちとせふる山の木のもとに風の吹くも月もにほさ錦れ

左の千里晴天月に秋のよのみしか夜とふけくむさりや
ともかくも絶えし月のにいて作のたかも衆も
さかひなき月ものむかしに作るや訪人右鳴蝉のく
山もなひくさすきさけれと作るをせらる見所あく作る
とへ暮月のむしも末はうちしにかくへ作ましとて
さるやとあかりし絶えすつつさ左なりにてさしかし歌さ
作るへくや

十一番

左持

権中納言元長

みし夜の一本桜はかゞみなりけりたがひにおしさ月かな

右　　権中納言政親　〻〻〻

しられあふ葉もつゞく木のまよりひかりさす花の夏の夜の月

左哥ひかりさす花とちらんものそなく初哥おもしろくて

一首のしたておもしろき作者をのかうそへ新拾遺

集にしらまほしき夜の月の桂も木のまより光を

花といつるひよろりと作る哥なとおもひいでて作り

夏の夜の花刻なりけるてはなる作なと等類なきにも

やと作く左哥陰翳の同刻の詞にあて作例も

作られたれと耳なれず当ておもりしかわ難しつる

詞もさまて不珍思給ふるこ前にて持となるへし

十二番

左持　　左少将為和　上冷泉

枝しげみともりこぬ月も立花のかをりやよはにてらしみえそめん

右　　左近中将為孝朝臣　下冷泉

夏の夜の月の影より秋風ぞふくさしもしらぬ森の下風

左哥夜の月の影より秋風ぞふくとひしるよりは

の景気おもしろくきこえあれはよしと作ちにまもりて

此秋の夕紅葉を見るに秋の明月のむかしもといへる

おもひ出とていつまてもあるらん左万葉集に

橘の下てるみちに作る哥夏あるの枝しけりにけり

なつかしき月のかげ橘の花の香をきこゆる作なり

いひたりて侍る猶よろしくや
十三番　水邊納涼
左　　左衛門督為廣
さしもはは庭井もたえぬ廣瀬の神のめくみにおもひ汲
右勝　　参議右近中将義澄
むすふ手にやかて夏をもわすれぬるさし井の水
左哥は万葉集に廣瀬の神の祭に侍るにや
むかしより我おもふ事をしといふ所をとりて右哥は
源氏物語にさし井にやくれにしも思ひけるにや
あつきにやおもへるよりに侍るとおもへり
左は例のことくなる判者の心ちかはまゐらせし

廣瀬の河をもうつせあさくや侍らん右はむかしの哥の詞
殊あれして首尾相應せりむかし可為勝
十四番
左勝　　准后
冬さらは汀に夏をわすれ水秋のむすふも涼しき
右　　沙弥宗世
おもひ出とも枕ならふる秋よりつきにけり原の風けふもくらして
左哥中の川をもむすひもゆふくれもいはていへる
冬夜さしてやつれ水の寒きにのこりてさむき枕
よる右枕流れ右にやらん侍る詞もよろしく聞ゆる
さりもしたる物を枕にもとりかけ侍らん

ありさらく枕にまてむとゆふて来けるにこそ見不知
又秋のつゆ涼しさの家とつらなりけりこそあら
詞はことゆゑと萩の露に樹陰とありけれは秋なる
陰のひかてもとちもありけんは左為勝

十五番

左 勝　　権中納言元長

夏の夜は暮てぬれはさぬるにひさけ人もまたよひつしにあつさはしも

右　　右衛門督季経

夏むしのかけにしらぬ波風あやしまてすゝしさもれと浦風ふく吹
きなさしおこしけるさ暮まて待わひて右方
風雅集に早苗とる田面の水のあさみどりけりとし

ここ夏に山風ふく吹と待ふ方下句はまで不相替と
左方も下句あまりによりて事も待さはぬかしくて
可為持

十六番

左 持　　前摂大臣 政

夏なきこてとや志めん夕むすぶ松のしたかけの涼しさ

右　　権大納言宣胤

あはれ浪の露むすぶ陰ひさき暮をけち浦風ふく吹く
夏首の樹陰てひかけにまかぬるしに左方も
この世の秋は氷ともに見ゆ枯木陰
めくみもなくしかりけるに待つけり

ゆりくとも網をひかおほはさまて侍るやらん右も宜に
宜心の絲れるもしいはゝ不始思侍らん人々のかし
よろしう侍るは勝まうてまあらしも網なとにもなり

十七番

左　　　入道親王道永

ましこさみなれとふるといふ波の瀧の白き網本とみえても

右　勝　　尭胤法親王

むかし瀧津いくつ波高くてみまかひのあさらしへく

左の歌瀧の白き網よとりてもと侍るにさる世のかけ
我恋の網かけいねしとはやまなれく侍るよしもなし
さ侍りしてもかくもや侍る右の歌伊勢物語よ渡の瀧

とゝのふる雨かみんと侍るとも山つて左の勝侍ら
る右はえらのやうにや侍らん

十八番

左　　　前関白

雨に消る夏もいそく秋の風さそ雨まつのるさ

右　勝　　邦高親王

鷺なかる川への湖中入日うかふる水の上ひしさ

左はいかなる雨に浦波たつ日かと侍るらんとも
かきも夏もいそく秋の風立てうつ波にさ一夜
やる析に侍る右入日をうかふる水の上にしさと侍る
水邊も景かしくつつ侍るは右為勝

十九番

左持　　女房

瀧乃音山風のこゑもけしきそふ秋はかりなる滝のしらいと

右　　前関白一条

むら瀧つ岩こそ風のあとに高くて秋をもむすふ岩のひゝきに

左の瀧乃音は山風のこゑもけしきにてかすかに涼

気色をしらしむる詞を妖艶なりと見ゆ左右又

後撰集やらんに氷の白糸のつくりてかゝることに

右は作ることを思ひて瀧の白あとに高くして

秋をもむすふ岩水のこゑにていふむひきありて

やうに作まいりしさ持とやいふや

廿番

左持　　権大納言寶澄

なるあやうき流れし河風の扇はまた一葉の秋なるらむ

右　　左大臣

山かけや岩もる川のつめたき水風も目にみえぬ風のかよひにし

左の一葉の秋をとりかへても作る風情をいひ

つくる様に作るかくしもしく言葉には清きも類なき

かきくしもしと先達のならひし作らにたるあやうき

いふ常にあらぬ詞まても作りしと撰者まかりても

こしらへくや千五百番歌合よりなるあやうき花やの

まつあらし毎年の立田の山乃暁の紅葉をといつる桜はは

みなしゆくぬれ若かはやうにみえしはしもしとゆゝ
うたとしもまことにゆりこしゝ難なしと
ゆるとえこしらねこしゝもみなしゆゝなしの謂同様

廿一番

左　　　　　　権中納言季経

ゆふされは水草かれにしほしこそとけにくゝのの風のこほ

右勝　　　　　寂蓮法師

むすはぬおもひへたてゝそ見ゆるしほしもこきうきしや庭風の水

左歌よしさしもこそとおもひとひかへしこひ志もしあらす
将をゆるえをとこ歌上下句はゆるゝし千五百番
歌合またしもしくの木の葉のかけをとらへてもあれ

しらぬのもせはいふゝあつゝと六百番歌合に苔水の
宿りあり是は埋らりしのもとに蛙の声のうつりしけき
あとしゆくゝしゆえも判者不難とこしく志と左あるゆしときの
合の例此毛乃難はいつねあしゆくて宿むにさ
さらしらへ又水をもしくうたふきさをほり庭すゆもとを
万葉集には庭くつ水とそれへしあむそことあり
枕とそしき月とみかるなりと宿なしても不苦歟左歌
新勅撰の中川の宿はかりしかの夏虫をのあすめし
をきのみうとゆるうすしさのを志水のうなあふた
首むかしゆらしのゆら権中納言以あてにて
廿二番ゆもとみゆらくあるへくしりは右為勝

廿二番

左勝　　　按察使俊量

水むすふ袂もあまやとりにさてしはしさかりの中川の宿

右　　　権中納言政顕

吹音もさそはぬ水の夏てしらや岩もる風のいつを如らし

右歌中五句のうつり岩もる風の出しやうき
さい風の音水のひゝきいつれも耳に遠き所なん
そこはかとなく所々いつくさるや若又納涼の心をきゝ
むすふ風のしく水のうへにすゝしさしつらく
ゆふ風の夜ふけ遊て水邊の題にいたくまさる
其もいつれよりはあるへく聞ゆ左水むすふ

ちさんてもあまたや涼氏えしと空蝉のさまをきれ
こゝろ見一段おほ所ましと来之句をさくゆふくさ
来て句の心ある処ぬるをゆるさうへはいかにと所ようく
やすのゆふましと岩もるの中川の宿と所さう
まれくや所らん

廿三番

左持　　　右近衛権少将為知

袖のまへ涼しさしいつこ河社の心やいさくるら影

右　　　参議雅俊

むすひあけし神わすまし沢水しむの社やいつのやらん

右歌無殊規模之上避池亭納涼之浅酌山水

遠流之源宜然哉左方取兼輔卿泉川之綺語
其躰優逸也雖徇古家之遺流剰得洗暑之
風味者乎

廿四番

左　持　中納言宣親

あきとみれは秋のやとりもなみまへて白玉岩をくゝり
すゝしさはよるのゆくへもそ水のさえそわたるや世をかさねむ　ぬる

右　勝　左近中将為孝卿

左ありやゆめかれとへて白玉のつゆにかくれと行方右と
とうくたるか判　但定家卿云右哥夏の秋
すゝしさへともに白玉の岩根のたえぬしのおつる瀧川

河水と行まして水鏡あそへこそ右と物かは文字に
河も白てつ行まてと右やさし勝へしや

廿五番　當道祝言

左　持　入道親王道永

ことの葉の道さかぬ稽古やまつとの代のあつしさとちきるこそ末なれ

右　式部卿親王

家の風吹つたへてきく道のちるをつけゆく代のすゑにこそ
左哥ことの葉の道さかぬ稽古をこそ世のためしとはいへ
道のくまの山の陰よりもあつまの浜のまさこ
よりも数あるへくおほえて行方右哥家之風吹
伝え道の塵もつきせぬ代のしるしこそも

いやまさりけるを御らんしおもひ給ふにえかなはすやくな

持とすへし

廿六番

左持　　前左大臣

代々の世のしつかにおさまるを右上ありさまにしつかなるもまさり

右　　尭胤法親王

このよの世にひろまれる稜宝はたれのはの和歌の浦人

左代々の世のしつかなるをおもふに思ひしひとつまさる

も一首の心そへてはひかりて延喜天暦の昔をおもふ

ならん右によしときこゆれと右は大常の右に

かなしつゝあらむも御らんことはりて道をなく

和歌の浦のとまりを文字ゝいふ御ありさま　標才の判

者なるよし大樹の流れひろくさかへの道の家

かの和歌の浦はむしろきはまらかつて京近の代勅

命つゝしみてきこゆ御まゝに堀河代すゑと撰集

ならるゝんとおもひ給へつゝまた御ありの文無勝負

廿七番

左持　　権大納言實隆

今ろこし天津乃文のこえもとゝて天日嗣の光をあめしる

右　　前関白

よく見せさとさりまつりのさとこえこ世をも思ひよりもなく成

なる日本紀神代巻よりあそこそのかしこき人の

天児屋命に勅ましましける詞に若為坊讃
と仰られしよりひさしく中臣と仰ける左右大津又
なりさかえきこし天日嗣と仰る当天智天皇近江の
大津の宮にあめのしたしろしめす世となりて御郡
位をと仰られしところ仰る郡位と云
てあまたつきつきしけれはや御郡位は
おこりけり中に神武天皇橿原宮に御位について世始
まり盛願ともいふへきにや大津の宮に定として
と仰るは彼れよりまさしき代々のことなれは
まことにめてたき事にて仰る国の人は此記をしくとさへ
かくひらかれ仰とある今の宣命の詞にもと

江の大津の宮をやすみしは宮趾の波のまに
と仰せこしけれはあらためられ元慶の
御在文子にかなも礼にあらはれたとしや
仰らるることもよきも又大礼をも仰せらる世中は
あれともあらぬ人へあはれなる事をまつりへは
ことにたひたひ仰られんや延喜二これ白河宣命
の詞にもよく仰せしとこのよろしくいさしの平懐
ある様におほしまたは今のこしをと仰る当時
相応し仰せこともよくも御とも（さき

女八番

左

権中納言宣親

いかしへのすゑかれいにしへの世のためしとやいはひきて君か名をも

右勝　左大臣

ゆらの都も君か代のためしにしる人の千代まてもためしにてさ

論兩首之君道於復堯風兼日之舊規者共雖

無優劣之期万歳千秋之寳作者左可謂勝右

廿九番

左勝　左近大将為和

木ころもこゝに国民をみまつりかしこき世の山や君か世のはしめ

右　權大納言宣胤

八隅しる君か代ことしも国栖等もつかふる氏はいさやしらん

右方国栖等あるは神武天皇より應神帝

ころしも猶ゆかしきにや万葉集なとにもみえ

ゆりくるとよしもなくもつて流れゆゑまたいかてこと

誠八隅しる君か代のためしなるへし新撰六帖や

らむまし十津河やらしめ国栖もかしと仕へ

まつらん其かくしかよ分こともともあり右方本ころ

またことく猶石と作るハ毛詩やらんにも道諭蔔

葛と作る葛の字を思ひて本ころとにハ葛与

つくさくハ子とせし山にと作る首尾相応せり国

栖ハむつふる右にさ猶しとくにて作れるにしもことと

子とせの山とこそひ作れハ勝とやいはん

三十番

左持　　　　　　　　　准后

ゆき行人やかよひし跡も今は只あとたえぬ代々につたへつゝ

右　　　　　　　民部卿為

きみゝの道ふみわけし人は世にありて今作もあり

左賢人の世にはつかへて傳説呂望があひ今も猶さしやとおもはしむ右はさうの

おほんはかりこれはすゑの世の左あるべきを右持

あまりにつきてあふべしと理事に申すにつかはす

廿一番

左　　　　　　　　前左大臣　政

まつりごと左ある代々のあとをしたへくもいつかしもふかき

右勝　　　　　　　右衛門督實經

家のかせかはしらぬもかは世にあらはれて見えぬ光

左勝ちなるとは備て申さねど左の方二首に

此作例もなかりしとひさしくありて

み申すはいにしへもかゝる中君の方もしき

思ひつゝや右の方もかはりしと申すに見えぬ

まかせ申すに難なくて勝と申し侍りぬ

廿二番

左勝　　　　　　　権中納言季經

ひさかたの雲けて国もあらたまる年もへむ

右　　　　　　　　権中納言政範

左をえらへりける世はあさましくて見ゆるにいかぬ草も木も月
左右ともに歌のさまはよろしく侍る右草尚
風躰幽優と見え侍るにやよろしくへる詞をとおりへる
にや見えけるはあまりと下りたるやうにまさりあしける侍る
に侍らん末の句猶おもひなく侍り左勝ぬへきに
つき勝侍るへし
廿三番
左持　　　　左衛門督為廣
すゑかなる花をも見えし今の世の跡とつけぬ人の数に入る左
右　　　　沙彌宗世
時あれは終に世に出るをつきしをしはめる左右の代にあふよろこひを見えさ

左右例の世に意見の判者をかく侍り避遁の御
奇合にて侍ると至愚のはからひにまかせ侍るにや秋
津島のよろしく侍るに左をもなほつねに侍るに
はつかしくこそ侍れ左もあまたに侍ると葉露も
家業にまかせてこそ侍るに哉端にまかせ侍る也諸
道侍り右奇継絶興廃とも侍る故事
あまりに耳なれ侍らぬ事にかけ侍りすこし聞
猶にかは思ふ侍るにこそ七番にて侍るまじく勝
負は付かたく侍るへし
三十番
左持　　　　権中納言元長

世をひろくあまねくめくむやはらけは文王のつかへる鳴鳳花

右　参議雅俊

神もよもやすらく国をてらさまにも道風にきこえつまれ花

両首共鳴鳳の声はつとめもつとめてつとめとかけ侍るは

とつとき右にまさりていひ出られて侍るは勝の字と

付たくおもひ給はれて左哥は又文王かへの鳳

鳴鳳とは侍る作者にはて哥の風情ひとつには海渡

もおもひて詠し侍るんさけれし当時おもしろくあり

風をはかるくおもひあらそはせてこそ侍るは無下

見眉とはいかにもや持とても侍るらし

廿五番

左持

かくてしも我世のへんかはりけるへはやむしさ左にて　女房

右　参議右近中将義澄

りかへ山はわかさきもやともやまむしさ左と見えて

左かくても我世のへんと侍る何らかの人への詞

とはみゆしかくれてかりけるへはやむしさ左

さとめてよもとかしも葉のいかにいひありて優艶

はやむし侍り述而不作信而好古といへるむかし

をやかしく又かりけるへと侍る当時老者老いる

とみこしもむかしにかはらぬ同にもおかしき

様と侍り右にこそしたにまさらぬと侍る左は贈答

なにはにさしてあしく柿本むかしくも仰ける
かゝる柿聖明の御よにも猶賢作を用ゐられ
むかしよりいまもなほしく思ひをのへうたよみける
猶かうつゝらなるをせられんは正路の花も
ゆかしくあらん衆人ゝ節をゆるくして関雎麟趾
なれなるらひ理世太平のことは隆周の昔にこそ
あらんとゆるは雨にした花も紅も花をあらせる
山吹りは世の花のことに風影のもおもひあらせらん
あやしく思ひ人仰らるゝ又難波江の
あしをおもひなりゆりあるにこそ

三十六番

左　　按察使俊量

あまくだる神の代のをしへのふみもよろづ代に

右勝　　右近中将為孝朝臣

たらちねのをしへなきなの花もありなへゆき時とこそあれ

左奇例の短智ふるきゆかしく仰られて
此の庭訓をむかし又鯉趨而庭をとて
むなしおもひのことも花の左とのこして
ゆかしき伯魚の儀なれに付くる何事も
不聞なあかは指南草ありし光時の真荻のこ
ゝろをいつくよりおもひ給ふてこそ
うち仰しとゆへおもひ給ふる優馬の歳

右庭のなかにすめるかはつのなくさき菜のかはりにはなし侍
ところとりいひてけるにや庭におもしろくなりて
せんさいの草はとにかく菓も見えたり左歌のかしこく
草のはしに持子田あやしきにやすらしく侍りけり
あつめたるにさ菜なりとはいかゝ若なのなを
もしきこえけるにやなとも思惟ゆゝしく侍り
大方かくふるひまかりて侍れしかるへくや侍らん
右哥一首のさまなとおほしく見えし侍れと
遺違斯なと侍るむねこそなりこそ侍れ
以右可為勝

作者　左方

	勝	持	負
女房	勝一	持二	負
准后	勝一	持一	負一
入道親王道永	勝	持一	負二
前左大臣	勝	持一	負二
前右大臣 故	勝	持二	負一
権大納言實隆	勝	持三	負
左衛門督為廣	勝	持二	負一
按察使俊量	勝一	持一	負一
權中納言宣親	勝	持	負三

権中納言季種　勝二　持　負二
権中納言元長　勝　持三　負
左近少将為和　勝一　持二　負

右方

式部卿親王　勝一　持一　負一
尭胤法親王　勝二　持一　負
前関白 一条　勝一　持二　負
左大臣　勝二　持一　負
参議右近中将義澄　勝一　持二　負
民部卿政為　勝一　持二　負
権大納言宣胤　勝　持二　負
右衛門督季中納　勝一　持二　負
沙弥宋世　勝一　持一　負一
参議雅俊　勝一　持二　負
権中納言政親　勝　持一　負二
左近中将為孝朝臣　勝二　持一　負

読師
講師
判者
　左衛門督藤原朝臣為廣

文亀三年六月十四日

110X
642
1

左方　勝五首　持十八首　負十三首
右方　勝十三首　持十八首　負五首